

研 究 紀 要

第 31 号

目 次

はじめに 1

所長

児 玉 政 光

《研究報告》

1 青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業 4
～総合社会教育センターの支援と

青少年による活動の進展との関わりについて～

育成研修課 社会教育主事 石 岡 靖 仁

2 実践を踏まえた今後の人財育成の在り方 27
～青森で生きる未来人財育成事業の実践から～

教育活動支援課 社会教育主事 高 橋 孝 次

青森県総合社会教育センター

はじめに

令和の時代を迎え、平成元年（1989年）7月に開設された総合社会教育センターは、30年を経過し、この度、研究紀要第31号を刊行します。

この30年の動きを振り返ってみると、1989年は天安門事件、ベルリンの壁の崩壊、1991年ソ連崩壊と日本のバブル崩壊、2001年アメリカ同時多発テロ、2008年リーマンショックを引き金とした世界同時不況、2011年東日本大震災の発生と大きな動きの中で、日本においてもグローバル社会と人口減少が進んできたところです。

一方、1995年 Windows 95の登場を契機としたパソコンの普及、1999年ドコモiモード携帯発売、2007年 iPhone 発売などスマートフォンの普及などとともに、AI技術が目覚ましく進展し、Society5.0と言われる超スマート社会に変化しつつあります。

このような中、社会教育に対するニーズは大きく変化しており、当センターにはその対応を不断に求められています。地域の人口減少や高齢化、職員組織の変化が大きく進んでおり、もはや、活性化というフレーズを用いて、「過去の社会教育」の復活に執着することは必ずしも最良の方法とは言えません。そのため、これまでのノウハウやプロセスを一度手放し、来たるべき未来に向けて、「新たな社会教育」を再構築すべき時期を迎えているものと考えています。

今年度の調査研究は、中学生・高校生及び大学生等の青少年の活動をメインにした二つの事業の活動分析をテーマとしています。

これからの若い世代にとって、どういう時代が到来し、どういう「社会教育」が求められるのか、未来のニーズを感じ取り（sencing）、出現すべき未来につなげること（presencing）によって、新たな事業展開を思い描いていきたいと考えています。

この研究成果は、そのための一助になるものと確信しております。

最後に、調査研究に当たり御協力頂きました関係者、各位に、心から感謝申し上げます。

令和2年3月

青森県総合社会教育センター
所長 児玉 政光

研 究 報 告

青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業

～総合社会教育センターの支援と青少年による活動の進展との関わりについて～

育成研修課 社会教育主事 石岡靖仁

要 旨

本稿は、平成28年度から令和元年度まで実施した「青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業（以下「本事業」）」について、参加している各団体（以下「モデル団体」）に対し、その事業内で行われた総合社会教育センター（以下「当センター」）の支援が、どのような効果をもたらしたかという点について、分析・研究したものである。

研究仮説を「総合社会教育センターが、高校生・大学生等を中心に社会参加活動・創作活動を行っている団体をモデル団体に指定し、永続的に可能な方法で活動の支援を行うことにより、当該モデル団体の活動意欲が増進され、活動が活性化される。」と定めた。

仮説の検証方法として、各モデル団体運営者の活動意識および団体の活動内容がどのように変容したかについて、モデル団体に指定された当初の状況と現在の状況とを比較検討することで示すこととした。

その結果、本事業は、活動意欲を増進させたり、活動自体を成立させたりすることで、モデル団体の活動を活性化する場合が多いことが明らかになり、おおむね仮説どおりであることが分かった。

この結論をふまえ、支援内容を再検討した上で、青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業における各団体への支援は今後も継続すべきであることを提言する。

キーワード：青少年，主体的，人財育成，社会教育施設，社会教育関係団体支援

目 次

I はじめに	5
II 事業の経緯	6
III 各モデル団体の沿革	10
IV 各団体への支援と団体の変容	15
V 支援の在り方の分析	20
VI 考察とまとめ	23
VII 研究を終えて	26

I はじめに

1 序文

青森県総合社会教育センター条例第二条に示されている当センターの業務は以下の九つである。

- 一 社会教育に関する調査及び研究に関すること。
- 二 社会教育に関する事務に従事する者の研修及び社会教育に関する指導者の養成に関すること。
- 三 社会教育に関する情報の収集及び提供に関すること。
- 四 社会教育及び家庭教育並びに県民の学習活動に関する相談に関すること。
- 五 社会教育に関する新たな事業の開発に関すること。
- 六 社会教育としての講座の開設及び講習会、講演会その他の集会の開催に関すること。
- 七 視聴覚教育に関する指導者の研修及び養成並びに視聴覚教育に関する教材の作成及び提供に関すること。
- 八 社会教育及び県民の学習活動のためその施設を利用させること。
- 九 その他社会教育の充実振興上必要な業務を行うこと。

このうち一から七が、当センター教育活動支援課や育成研修課及び指定管理者が主となって企画運営する「人財育成」「教育活動支援」「市町村・団体支援」「生涯学習活動支援」の各事業であり、当センターの要覧に事業計画が示される業務である。

一方、「八 社会教育及び県民の学習活動のためその施設を利用させること。」は、主に指定管理者による施設提供事業に関わる項目であり、当センターの社会教育施設としての機能を表したものである。そのため当センター要覧には事業計画ではなく、提供できる施設内容と使用料の説明のみが示されており、一見単なる「貸館業務」であるようにも見える。

しかし、この第二条八項の業務は、社会教育関係

団体に対する積極的な支援を含んだ業務であるといえる。

なぜなら、当センターは平成元年度の開所時から、地域の社会教育関係団体に開放するための「団体連絡室」をセンター内に設置し、青森県ボーイスカウト連盟や青森県子ども会育成連合会が本部事務局として使用できるようにすることで、今日まで30年間に渡り青少年教育分野における団体活動支援を継続してきた経緯があるからである。

さらに、当センター内全17の研修室の使用料については、社会教育関係団体利用に際し免除する規則を設け、県内の社会教育関係団体全般に対し支援している。

このように、社会教育施設として「社会教育関係者が集える機能」を効果的に用い、社会教育の充実振興を図るための措置を、当センターは従前から講じてきた。

さて、今回の研究対象である「青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業」は当センターの人財育成事業の一つである一方、事業の性質としては、施設提供を主軸とした社会教育関係団体支援の性格を多分に含む事業であるといえる。

言い換えれば、本事業は、当センターが持つ社会教育施設としての機能と、学びのオーガナイザーとしての社会教育行政職員を活用する機能とを融合させたもので、当センターの他事業や県生涯学習課主催事業とは異なる面を持ちながら、地域の公民館や社会体育施設の事業とは共通する面があるという、当センターにおいてはユニークな性質を持つ事業である。

今回の研究によって、本事業が参加団体にとってどのような効果をもたらしてきたかを検証することになるが、同時に当センターの事業全体の中で今後もこの事業が必要であるかどうかについても述べていきたい。

2 研究仮説

総合社会教育センターが、高校生・大学生等を中心に社会参加活動・創作活動を行っている団体をモデル団体に指定し、永続的に可能な方法で活動の支援を行うことにより、当該モデル団体の活動意欲が増進され、活動が活性化される。

この仮説は本事業の実施要項に示されている趣旨と密接な関係がある。そのため仮説設定の理由については次章「Ⅱ 事業の経緯 2 平成 28 年度以降の事業構想」で詳しく説明する。

なお、仮説の検証方法は、次章「Ⅲ 各モデル団体の沿革」から「Ⅵ 考察」までにより、各モデル団体運営者である青少年自身の活動意識や団体の活動内容がどのように変容したかについて、当センターの支援の経過と併せ見ることとした。

Ⅱ 事業の経緯

1 前身事業（平成 27 年度）の着想と事業構想

本事業の趣旨は、平成 28 年度から令和元年度の実施要項では次のように設定されている。

青森県総合社会教育センターは、高校生・大学生等を中心に社会参加活動・創作活動を行っている団体をモデル団体に指定し、当該団体と連携しながら、青少年の社会参加活動・創作活動の推進に取り組むための方策を研究する。

（平成 28 年度から令和元年度実施要項より）

文中、本事業の最も重要な特質を表すのは「高校生・大学生等を中心に」という部分である。

前章で述べた通り、当センターは開所当時から施設提供事業を通じて社会教育関係団体であるボーイスカウト連盟や青森県子ども会育成連合会を支援してきた経緯がある。一般に青少年団体とも呼ばれるこれらの社会教育団体は、青少年自身が主宰するものではなく、青少年を指導・育成する立場にある年長者が主宰・運営を行っている団体である。

本事業は、このような年長者が運営する社会教育関係団体を支援するものではなく、高校生・大学生等を中心とした社会参加活動・創作活動団体を支援するもの、という特徴を有する。

このようになった経緯は、平成 27 年度当時方策を検討していた当センター「賑わい化」計画（賑わいのあるセンター）に端を発する。

この「賑わい化」計画とは、当センターの事業計画に表れる名称ではなく、施設提供事業における施設の形態とサービス内容との改変を総称したもの

である、例えば、以下のような改変の取組がある。

- ・ 1 階南側の展示ホールからソファを撤去して机と椅子を置くことで、来場者が自由に利用できる「ラーニングスペース」とした。
- ・ 1 階ありす（学習情報室）窓口前の教育関係者対象の「学習情報サービス室」から映像資料以外の学習資料を撤去し、登録した一般県民が利用できる「ラーニングスペース」を作った。また、西側奥の部分を、不登校児童生徒等が日常的に居場所として利用できるスペースとして、一般利用と隔てる形で確保した。ちなみに、このスペースで不登校児支援を行う団体として活動し始めたのが「L e s t a レスタ（Ⅲ 各モデル団体の沿革 で詳述）」である。
- ・ 2 階大研修室前のクローゼットを移設し、そのスペースをギャラリー「画伯のたまご」と名付けて小・中学生の作品展示に活用した。
- ・ 1 階保健室東側の託児用「幼児プレールーム」を「ほのぼのルーム」と改称し、子育て世代の親子が共に過ごせる居場所とした。

以上のような取組により来場数が増加すると予想される県民の年齢層は、幼児、小・中学生、子育てをする保護者、高齢者であった。

ーでは、最終的に、全年齢層の来所者による「賑わい」を生むためには、高校生や大学生にどのように施設を利用してもらおうべきかー

このような状況から、当時当センターの所長を務めていた坂本徹氏を中心として着想されたのが、本事業の前身、平成 27 年度の「社会参加活動モデル団体研究事業」であった。

平成 27 年 7 月に決裁された「社会参加活動モデル団体研究事業要項（図 1）」の起案理由において、この事業を行う理由を、次のように述べている。

総合社会教育センターは、運営に係る使命の一つとして「学びあい・育ち合い文化の創造」がある。そこで、関係団体と連携する中で、特に若年層の社会参加活動の推進に取り組み、「賑わいのあるセンター」を進める方策を検討していくために、高校生・大学生を中心に社会参加活動を行っている団体をモデル団体として研究するものである。

※ 社会参加活動支援については、指定管理者

の業務に含まれているが、社会教育センター全体での取り組み課題でもあり、且つ、公機関や大学等においては、指定管理者よりも社会教育センター名の方が受け取る側の扱いに差が出てくる可能性があることから、「賑わいのあるセンター」取組の一環も含めて、社会教育センター側で要項を定めるものである。

この前身事業の起案理由と事業要項のポイントは以下の通りである。

- ・ 起案理由に「関係団体と連携する中で」とあるが、ここで想定している関係団体とは青森市内の各大学及び高校である。
- ・ 事業要項「1 趣旨」における「団体等と連携して」の連携先は、学生サークルそのものを指している。
- ・ 同「4 モデル団体への対応」中の①～⑦の項目の業務担当は、以下の通り。
 - 指定管理者…①・②・③・⑦
 - 育成研修課…④・⑤・⑥
- ・ 以下の項目（図中下線部）は、平成 28 年度からの「青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業実施要項」では廃止・削除されている。
 - △「2 研究団体」(2)における1校につき1団体とする原則
 - △「3 研究活動」②
 - △「4 モデル団体への対応」③

このように、平成 27 年度においては、高校生・大学生自身が当センターに来所し、活動してもらうことで「賑わいのあるセンター」に資すること、及び来所による活動が可能な団体を各大学・高校の推薦（承認）によりモデル団体に決定すること、という2点を主眼として事業が構想されていたことが分かる。この主眼は、平成 28 年度以降の「青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業」では改められるが、このことは「2 平成 28 年度以降の事業構想」で詳述する。

また、平成 27 年度の実際の事業実施内容や参加した団体については全ての記録は残っておらず、全貌は不明だが、「3 研究活動」の②サークル交流会（学生団体交流会）については当時のモデル団体である「L e s t a」「キャリアサポートクラブコ

社会参加活動モデル団体研究事業要項
(※平成 27 年度)

1 趣旨

青森県総合社会教育センターは、高校生・大学生等を中心に社会参加活動を行っている団体等と連携して、若年層の社会参加活動の推進に取り組むための方策を研究する。

2 研究団体

(1) 団体数

概ね以下の団体数とする。高校生の団体
5 大学生の団体 5

(2) その他

モデル団体は原則として1校につき1団体とし、センターが総合的に勘案して判断し決定する。

3 研究活動

①モデル団体の連絡会議（年1回）

②モデル団体を含めたサークル交流会（年1回）

③アンケート等

④センター内での活動

4 モデル団体への対応

①情報発信用の専用掲示スペースの設置

②ミーティング等を行う際の優先スペースの確保

③連絡用私書箱の設置

④センターの広報紙やHP等での活動状況紹介

⑤社会教育主事等による情報提供とアドバイス

⑥名義使用の許可（「協力 青森県総合社会教育センター」など）

⑦研修室使用料の減免

(後略)

図1 平成 27 年度事業要項

ンソーシウム」(キャリアサポ連合。Ⅲ 各モデル団体の沿革で詳述)」が共同で実施した記録がある。この活動自体は平成 26 年度から行われているものであり、平成 27 年度にモデル団体となった以下の団体が参加している。

- ・青森南高校 J R C 部
- ・青森中央高校読み聞かせ隊
- ・青森西高校おもてなし隊
- ・盲学校インターアクト部
- ・「キャリアサポートクラブコンソーシウム」(青森中央学院大学, 青森公立大学, 保健大学, 弘前大学, 東北女子大学)
- ・「L e s t a」(青森公立大学)
- ・選挙へGO!! (青森中央学院大学)
- ・スマイル (保健大学)

2 平成 28 年度以降の事業構想

平成 27 年度の前身事業に続き、平成 28 年 3 月に要項を改定して開始した後継事業が、「青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業」である。実施要項は以下の通り(1 趣旨は再掲)である。なお、前身事業の実施要項から内容が追加・変更された部分には下線を引いた。(図 2)

なお、前身事業の実施要項から廃止・削除された項目・文言については「1 前身事業の着想と事業構想」で述べた通りである。

改定された平成 28 年度以降のモデル団体研究事業は、次のように構想されている。

- ・「学校外での活動場所を求めている高校生・大学生を支援すること」をより重視した。
- ・学校に属している団体(学校の教育活動に対する研修室の使用料減免は、開所時から可能である)を推薦して当センターに「連れてくる」という方法を変え、高校生・大学生自身が「主体的に」学校内外で運営している団体やインカレサークルのような団体を「公募により」積極的に参加させることとした。

これら 2 つの構想を土台とし、青少年が主体的に運営しているバンド、ダンスグループなどの創作的・芸術的・芸術的な活動団体に広く呼びかけ、スタジオ(第 1 多目的研修室)を使ってもらうことで「賑わいのあるセンター」取組に資する、という着想があり、モデル団体の種類に「創作活動団体」が

青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業実施要項(※平成 28~30 年度)

1 趣旨

青森県総合社会教育センター(以下「センター」という。)は、高校生・大学生等を中心に社会参加活動・創作活動を行っている団体をモデル団体に指定し、当該団体と連携しながら、青少年の社会参加活動・創作活動の推進に取り組むための方策を研究する。

2 研究内容

- (1) モデル団体の指定
- (2) 活動場所の提供
- (3) 研究のための会議の開催(年 1 回程度)
- (4) アンケート調査の実施

3 モデル団体の指定

- (1) センターが総合的に勘案して選定する。
- (2) モデル団体は、単年度ごとに概ね 20 団体とする。

4 モデル団体への対応

- (1) 発表の場の提供(生涯学習フェア等)
- (2) 情報発信用の専用掲示スペースの設置
- (3) ミーティング等を行うスペースの用意(優先的に使用可)
- (4) 所報「響」やHP等での活動状況の紹介
- (5) 社会教育主事等による情報提供とアドバイス
- (6) 名義使用の許可(「協力 青森県総合社会教育センター」など)
- (7) 研修室等使用料の減免

(後略)

図 2 平成 28~30 年度事業実施要項

加わった。

そのため、構成人数の小規模な団体や、単年度だけ活動したい団体も加わって参加希望団体が増加することが想定されることになり、指定するモデル団体数を単年度 20 団体程度へと増やした。

これに関連して、前身事業での「連絡用私書箱」については、単年度だけ参加するモデル団体向けではなく、「Lesta」や「キャリアサポートクラブコンソーシウム」など、当センターの事業に直接関わる活動を長期間行う団体に対して使用してもらう方が望ましいとし、モデル団体研究事業とは切り離して運用することとした。

また、創作活動に関しては、大研修室のステージ

等を用いた発表の場を各団体に提供できるよう、生涯学習フェアやキッズフェア等での発表を可能であるとしました。

なお、サークル交流会等、横のつながりを生む活動は、参加団体にとって有益且つ楽しく魅力的な活動であって、意欲的に実施することができる。そのため、モデル団体研究事業が主宰する交流会とせず、従来通り学生団体自身が主体的に運営すべきであるとしました。社会教育主事等は情報提供とアドバイスを行い、温かく見守ればよいとの考えであった。

ここで構想された「高校生・大学生が中心となって」主体的に行われる活動の支援は、年長者が主宰する社会教育関係団体への支援と同様、社会教育行政が果たすべき役割と考えられる。

そして、その支援のねらいは、人財育成を通じた社会教育の充実振興であり、当センターの9つの業務のうち「九 その他社会教育の充実振興上必要な業務を行うこと」に関わる。

また、支援の方法は、社会教育主事等による「団体のコントロール」ではなく、施設提供を主軸とし、活動の環境やチャンスを整えて見守ることであるので、施設機能が存続する限り永続的に行うことのできるものである。

3 2019年度（令和元年度）事業実施要項について

令和元年度から、本事業を明確に単年度事業と位置づけ、年度初めに新たな実施要項（図3）を定めた。その際、前年度までの実施要項に対し、項目立て等内容構成や表記の仕方を、誰にでも分かりやすいように大きく変更したが、事業内容に変化はない。

表記上内容が変化して見える部分については、実際には従来から行っていたものの要項上では明示されていなかった部分を追加したもの（各団体への対応内容やモデル団体指定にあたっての審査条件等について等）や、指定モデル団体が県の施設を使用する際の使用料免除に値する根拠を明らかにするための追加等にとどまっており、事業の性質や趣旨、指定団体の条件、当センター職員の動き等について変化はない。

これらのことから、本稿では、令和元年度実施要項を平成28年度から30年度のものと同じとみなし、内容についての詳しい解説は避ける。

2019年度（令和元年度） 青少年社会参加活動・創作活動 モデル団体研究事業実施要項

1 趣旨

（中略）

4 対象モデル団体の指定（4～9月）

（1）研究対象となるモデル団体の指定は、次の各号に掲げる基準により、総合的に勘案して審査し、決定する。

① 構成員の基準

次のいずれにも該当するものであること。

- ア 高校生・大学生・専門学校生等の青少年によって構成されている団体であること。
- イ 青少年自身が自主的・主体的に運営を行っている団体であること。

② 活動内容の基準

次のいずれにも該当するものであること。

- ア 活動の目的及び内容が青少年による社会参加活動及び創作活動に類すると認められるもので、公益性のあるものであること。
- イ 内容が、今後地域の活動モデルになり得るものであること。
- ウ 営利を目的とするものでないこと。
- エ 宗教的目的を有するものでないこと。
- オ 政治的目的を有するものでないこと。
- カ 保健衛生及び災害防止について必要な措置が講じられていること。
- キ 未成年の参加する活動については、必要に応じて保護者の同意を得ること。
- ク センターが行う研究に年間を通じて参加できること。

（2）モデル団体は、概ね20団体の指定とし、指定に関する募集は当所ホームページおよび県内各高等学校、各大学へのチラシ配付を通じて行う。

（3）応募団体への審査方法については、事業担当者および担当課長による、団体代表者への面接審査を原則とする。

5 研究活動に付随するモデル団体への対応（通年）

- （1）研修室等使用料の減免
- （2）運営会議・研修・作業等での教材開発室の使用承認
- （3）発表の場の提供（生涯学習フェア等）
- （4）情報発信用の専用掲示スペースの設置
- （5）所報「響」やHP等での活動状況の紹介
- （6）社会教育主事等による情報提供とアドバイス
- （7）地域活動団体、創作活動団体、教育活動団体等との連携に関する連絡調整
- （8）協力名義使用の承認（「協力 青森県総合社会教育センター」など）

（後略）

図3 令和元年度事業実施要項

Ⅲ 各モデル団体の沿革

本章では、平成28年度から令和元年度4年間の指定モデル団体の沿革をまとめる。(表1～4)

表1 平成28年度指定モデル団体

年度	種別	団体名	指定年数	登録者数	活動目的・趣旨	活動例
平成28年度	社会参加活動	キャリアサポートクラブコンソーシアム	1年目	大学生 496名	総合社会教育センター「高大連携キャリアサポート推進事業」 ^{注(1)} に参加するボランティア大学生の自主組織。会員の資質向上と交流を行う。	ワークショップ・プレゼンテーション・ファシリテーションに関する研修会企画、スポーツ大会、研修合宿、学生団体交流会、キャリアサポーターズ
		L e s t a	1年目	大学生 ※人数不明	不登校や障がいのある子どもたちの理解と支援、小中高校生が参加するキャリア形成企画を行う。会員の資質向上と交流を行う。	寺子屋ありす ^{注(2)} 、研修会、おおぞら学園訪問、ふるさとクッキング、アートで交流、アフリカンフェスタ、エンジョイ！サバイバル、手作り絵本教室、生涯学習フェア参加、県立盲学校文化祭参加、ワールドカフェ
		青森中央高校読み聞かせ隊	1年目	高校生 ※人数不明	青森中央高校で保育を学ぶ生徒らが「読み聞かせ隊」を結成。幼児向けの読み聞かせ活動を行う。	県立美術館での読み聞かせ企画、青森市内の保育園訪問、三陸の高校生との交流と保育所での読み聞かせ（ドリカム人づくり推進事業）
		LFV～人の可能性を広げる団体～	1年目	大学生 4名	地域の子どもたち対象のイベントを企画・運営し、参加者の笑顔を見ること、交流の場作り、世界で活躍ができる人をつくることから、大学生自らも楽しむ。	青森大学構内宝探しイベント、わくわく広場雪であばれるの会、幸畑地区イベント参加
		学生団体「選挙へGO!!」	1年目	大学生 ※人数不明	青森県の投票率全国最下位に端を發し、若者の投票率向上を目指す。	小中高校での模擬投票の実施、期日前投票所設置、居酒屋トーク、政治家との女子会、政治家動画の若者向けのメッセージ配信
		学生インタビュー団体 WAO!!	1年目	大学生 ※人数不明	キャリアサポでの「カタリ」をベースに、高校生や大学生のキャリア意識を向上させる。	青森県内の情熱ある人にインタビューをし、その記事をホームページに掲載
	創作活動	AMDC (Aomori Minami Dance Club)	1年目	高校生 10名	青森南高校ダンスサークル。自らがダンスを楽しみながら、ダンスを通して地域を盛り上げる。	上級生が様々なダンスの基礎から応用までを指導。文化祭と青森市のダンスイベントに出演しオリジナルのダンスを披露
		田中の彼方	1年目	高校生 5名	青森高校軽音サークル所属。自らがバンド活動を楽しみながら、表現の場を通して地域を盛り上げる。	ライブハウス、文化祭での演奏
		アザラシ	1年目	高校生 5名	青森商業高校ダンスサークル。自らがダンスを楽しみながら、ダンスを通して地域を盛り上げる。	文化祭、3年生を送る会での発表、キッズフェアでの発表

〈注〉

(1) 平成24年度から当センターで実施している人財育成事業。平成30年度より「大学生とカタリ！キャリアサポート形成事業」に名称を改めた。中学校や高校にボランティア大学生が出向き、生徒と一緒に個々の生徒の将来について考えるワークショップを実施している。

(2) 平成28年度から当センターで実施している人財育成事業「青少年異年齢交流モデル事業」における青森市会場での演習活動名称。小学生から大学生までが交流しながら、学校の宿題をしたり、交流レクリエーションを行ったりしている。



図4 「アザラシ」・キッズフェア

表2 平成29年度指定モデル団体

年度	種別	団体名	指定年数	登録者数	活動目的・趣旨	活動例
平成29年度	社会参加活動	キャリアサポートクラブコンソーシアム	2年目	大学生 529名	総合社会教育センター「高大連携キャリアサポート推進事業」ボランティア大学生の自主組織。ワークショップを通じ高校生とともに成長したい。	プレゼン大会、スポーツ大会、キャリアサポリターンズ、学生団体交流会
		L e s t a	2年目	大学生 9名, 高校生 12名	寺子屋ありす運営、小中高校生が参加するイベント等を通じて異年齢交流を行い、参加者のコミュニケーション力向上を図る。	寺子屋ありす、研修会、ふるさとクッキング、アートイベント、サバイバル、手作り絵本、生涯学習フェア参加、ワールドカフェ
		青森中央高校読み聞かせ隊	2年目	高校生 19名	青森中央高校で保育を学ぶ生徒らが「読み聞かせ隊」を結成。幼児向けの読み聞かせ等ボランティア活動を通じ、将来に役立てる。	読み聞かせ（市民図書館、保育園、聾学校）、手話による読み聞かせ（特別支援学校幼稚部、小学部）、岩手県の高校生との復興支援交流イベント
		L F V～人の可能性を広げる団体～	2年目	大学生 18名	「とにかく楽しい！」をテーマに、子どもから大人まで全ての人が共に成長し、視野を大きく広げられるようなイベントを開催する。	大学生と小学生が遊ぶイベント、大学構内スノーフェスティバル、幸畑まちづくり協議会と連携した地域活動参加
		「世界遺産登録を目指す縄文遺跡群学芸員なりきりツアー」実行委員会	1年目	高校生 8名	縄文遺跡群の世界遺産登録にむけて、その機運を若い世代、高校生からも盛り上げていく。	学芸員体験と土器作りワークショップガイド体験ツアー、あおもり北のまほろば歴史館職員を講師としたガイド説明講習会
		青森まちなかしかへらあ～s	1年目	大学生 57名	青森公立大学のサークル。青森市の商店街のイベント運営の手伝いなどを通してまちづくりを考える。	青森市新町商店街の花植えとゴミ拾い参加、AOMORI 春フェスティバル手伝い、青森ねぶた祭り観光案内
	創作活動	確原色	1年目	高校生 14名	ダンスをする高校生のグループに練習や発表の場所を作るなど活動環境を整える。	合同文化イベント「確原色」を年2回実施
		名無しの労働者	1年目	高校生 3名	サイリウムパフォーマンスをするために人を集めてグループを作ること。将来は災害や病気で困っている人たちをパフォーマンスで元気づけたい。	学校の文化祭で発表



図5 平成29年度学生団体交流会
(主催:「キャリアサポートクラブコンソーシアム」)



図6 「AMDC」

表3 平成30年度指定モデル団体

年度	種別	団体名	指定年数	登録者数	活動目的・趣旨	活動例
平成30年度	社会参加活動	キャリアサポートクラブコンソーシアム	3年目	大学生 630名	総合社会教育センター「大学生とカタール!キャリアサポート形成事業」に参加するボランティア大学生の自主組織。ワークショップを通じ高校生とともに成長したい。	高校生のためのキャリア形成講座(年3回)、キャリアサポーターズ、大学生交流のスポーツ大会、プレゼン大会、合宿、カタリ合宿
		L e s t a	3年目	大学生 30名、 高校生 20名	寺子屋ありす運営。小中高校生が参加するイベント等を通じて異年齢交流を行い、参加者のコミュニケーション力向上を図る。	寺子屋ありす、研修会、ふるさとクッキング、アートイベント、サバイバル、手作り絵本、生涯学習フェア参加、ワールドカフェ
		青森中央高校読み聞かせ隊	3年目	高校生 10名	青森中央高校で保育を学ぶ生徒らが「読み聞かせ隊」を結成。幼児向けの読み聞かせ等ボランティア活動を通じ、将来に役立てる。	毎週水曜日に青森中央高校で練習、毎週日曜日に青森市民図書館での読み聞かせ、月2回の土曜日に青森市内保育園での読み聞かせ、岩手県の高校生との復興支援交流イベント、県立美術館おはなしフェスタ
		L F V～人の可能性を広げる団体～	3年目	大学生 35名	「とにかく楽しい!」をテーマに、子どもから大人まで全ての人が共に成長し、視野を大きく広げられるようなイベントを開催する。	7月みんなで協力!!宝を探してナゾを解け!!IN青森大学、11月掘って掘って掘りまくれ!タイムカプセルを埋めよう!!IN青森大学、1月雪で暴れるの会、青森市幸畑地域青年団・特別養護老人ホーム正寿園・五所川原市の子育てサークルPAPA HUGなどのイベント協力
		「世界遺産登録を目指す縄文遺跡群学芸員なりきりツアー」実行委員会	2年目	高校生 8名	縄文遺跡群の世界遺産登録にむけて、その機運を若い世代、高校生からも盛り上げていく。	学芸員体験と土器作りワークショップガイド体験ツアー、あおもり北のまほろば歴史館職員を講師としたガイド説明講習会
	青森学生団体A S C	1年目	高校生・大学生合わせて 12名	青森の活性化のため、学習や研究を通じて郷土の良さを理解し、知識や教養を高め、活動を通じて青森の魅力を全国へ発信していく。	新あおもり検定運営、ねぶた祭りお土産販売、CM大賞用CM作り参加、郷土メシ作りイベント	
	創作活動	確原色	2年目	高校生 24名、 大学生 2名、 専門学校生 1名	合同文化イベント「確原色」の実施等を通じて、学生自身の手で地域と密着した活動を作り上げる。	合同文化イベント「確原色」を年2回実施、高校の文化祭模擬店イベントの企画立案



図7 平成29年度モデル団体代表者会議



図8 「Lesta」・寺子屋ありす

表4 令和元年度指定モデル団体

年度	種別	団体名	指定年数	登録者数	活動目的・趣旨	活動例
令和元年度	社会参加活動	キャリアサポートクラブコンソーシアム	4年目	大学生 657名	総合社会教育センター「大学生とカタル！キャリアサポート形成事業」に参加するボランティア大学生の自主組織。ワークショップを通じ高校生とともに成長したい。	プレゼン大会、スポーツ大会、ハイ×カレ、学生団体交流会
		L e s t a	4年目	大学生 11名、 高校生 3名、 専門学校 生1名	異年齢交流（子どもから高校生・大学生、高齢者まで）活動を行うこと。その活動で、特に高校生・大学生が、視野を広げたり、人の温かさを実感したりすることができると考えている。	寺子屋ありす、研修会、ふるさとクッキング、アートイベント、サバイバル、手作り絵本、生涯学習フェア参加、ワールドカフェ
		青森中央高校読み聞かせ隊	4年目	高校生 8名	子どもが好きで、将来は保育士や教員を目指す生徒が経験を積むことのできる活動の場。高校生自身が楽しんでできる活動なので継続して行いたい。	岩手県三陸の保育園での読み聞かせ、青森豊学校文化祭で、手話による読み聞かせ、サンロード青森の読書イベントでの読み聞かせ、毎週月曜日に1時間読む練習
		L F V～人の可能性を広げる団体～	4年目	大学生 41名	青森大学近隣の、幸畑小学校・横内小学校の子どもたちには、外遊びできる環境がもっと必要であるため、遊びの機会を作り出したい。そこから、青森市を少しでも活性化させたい。	5月：鬼ごっこイベント・ごじゃらつと広場参加 7月：水遊びイベント・幸畑ねぶた祭り参加、8月：お化け屋敷、10月：ハロウィンと昔の遊び、11月：L F Vと遊ぶべし・あびお秋祭り参加、1月：雪で暴れるの会
		青森学生団体A S C	2年目	高校生・大学生 合わせて 12名	青森の活性化のため、学習や研究を通じて郷土の良さを理解し、知識や教養を高め、活動を通じて青森の魅力を全国へ発信していくことを最終目的とする。	新あおもり検定運営、青森県の特産品を使ったお土産開発、ねぶた祭りお土産販売、金魚ねぶたを作るイベント、CM大賞用青森市CM作り参加、青森県の郷土料理を作るイベント、全国地域活性化団体コンテスト参加
		自然サークルS D G s	1年目	大学生 15名	「青い森の自然環境を再評価しよう」をスローガンにしたアウトドア活動。S D G sの理念を土台とし、青森の地域の問題を解決するためにアクションを起こす。	毎週木曜日定例活動（ねぶた廃材集め、薪割り、イベント企画）、毎月1回「焚き火の語り場」開催、地域住民を対象に薪割りイベント、八甲田登山、木こり講座、あおもり雪灯り祭りイグルー作り
		ゆめびと育成プロジェクトチーム	1年目	大学生 18名	子どもたちが「ゆめ」について考えるきっかけづくりをしたい。「ゆめ」を考えることでメンタル等が強くなり、子どもたちのより良い人格形成へとつながっていく。そのために活動意欲が高まる活動をしたい。	職業体験イベント（小・中学生対象、年2回）、ヒューマンライブラリー（中・高校生対象、年1回）、ワークショップ交流イベント
		文学研究 Think With Us	1年目	高校生 6名	国籍、文化、性別、時代を問わず、様々な作家について研究や作品読解をすることで、メンバーが「文学の世界から、多様な価値観を見だし、理解すること。また、その研究成果を発表することで、一般の方々に文学の重要性（多様な価値に触れられること）を広める。	研究は、1回の研究につき、一人の作家についてプロフィール・人間関係・代表作・非代表作の4点について討議し、全員の意見を取り込んだ結論にまとめる活動。発表は、前述の研究の発表活動。ボランティアは、県内各地の文学資料館の利用者数増に貢献できる活動の創出（例：学生による展示資料解説ガイド等）
	創作活動	確原色	3年目	高校生 24名、 大学生 2名、 専門学校 生1名	人口減少に伴って、青森市の若者が減少し、青森駅前もシャッター街化している。その状況を、青森が好きなき若者が変えて活気を取り戻したい。自分たちの活動を通じて、地域活性化につなげられる新たな活動を発見することができる考える。	年度末に、高校3年生をメインとした2日間のイベント「確原色」（バンド、ダンス、カラオケの発表）を行う。夏～秋はイベントの企画会議

1 平成 28 年度

社会参加活動団体については「キャリアサポートクラブコンソーシアム」と「Lesta」の2団体が、本事業において中心的な役割を果たす団体として、平成 27 年度の前身事業当時から参加している。「青森中央高校読み聞かせ隊」も学校推薦で平成 27 年度から継続して参加している。「学生インタビュー団体WAO!!」は、「キャリアサポートクラブコンソーシアム」にも参加している学生が代表に就任したことをきっかけに参加したが、年度末、代表を退くとともに脱退した。「LFV」は青森大学内のサークルとして平成 27 年度発足。発足当時から幸畑地区の活動に参加していたことから、同じ志を持つ学生団体との交流を求めてモデル団体に参加した。「選挙へGo!!」は青森公立大学から推薦されたサークルである。これら6団体は全て平成 28 年度の「キャリアサポートクラブコンソーシアム」主催サークル交流会（学生団体交流会）に参加している。

創作活動の3団体は、いずれも経費のかからない練習場所を求めて、公募により本事業に参加したものである。3団体のうち、「AMDC」は青森南高校の部活動としても認められていたが、高校には屋内の練習場所がないため、冬場の練習場所として当センターが適していると考えての参加だった。



図9 平成 28 年度学生団体交流会

2 平成 29 年度

社会参加活動団体として、「世界遺産登録を目指す縄文遺跡群学芸員なりきりツアー」実行委員会と「青森まちなかしかへらあ〜s」が参加。どちらの

団体も自分の団体の認知度を上げることを希望して、本事業に参加した。

創作活動団体として、「確原色」と「名無しの労働者」が参加した。名無しの労働者は練習場所を求めて公募により参加した。確原色はイベント団体として平成 27 年度発足し、「AMDC」が「確原色」内の中心団体だった。本事業の趣旨が「AMDC」より「確原色」の目的に近かったため、「AMDC」を内部に含む形で、この年度から確原色として参加することになった。「確原色」はこの年、NPO法人カタリバが企画する「全国高校生マイプロジェクトアワード」にも参加している。

3 平成 30 年度

社会参加活動団体として、平成 27 年発足の「青森学生団体ASC」が参加した。発足当時から商品開発（青森の土産品）等企業と連携した活動で活躍していた団体。団体の活動がより学生主体で行われる内容にシフトしてきた段階で、学生同士の連携で地域貢献活動を活性化させたいと望み、本事業に参加した。

4 令和元年度

社会参加活動団体として、3団体が参加した。「自然サークルSDGs」は平成 29 年発足の青森大学のサークルで地域とのネットワーク作りを求めていたことから、大学からの推薦があった。「ゆめびと育成プロジェクトチーム」は、発足と同時に本事業に参加。ヒューマンライブラリーやキャリアサポートショップなど、元来、高校生や大学生以上を対象に行われてきた学びのイベントを小中学生向けに行いたいと希望し、活動場所の支援を希望しての参加であった。「文学研究 Think With Us」は、青森南高校の生徒たちが部活動以外の活動として行ってきた文学研究活動について、一般に発表する機会と活動場所とを求めていたことから、本事業の支援を受けたいという希望があつての参加だった。

5 参加しなくなった団体

本事業に参加しなくなった団体もある。ほとんどの場合は、その団体の活動が行われなくなったこと

で、モデル団体への継続参加を希望しなくなった。
創作活動団体については、「確原色」以外は自校の文化祭発表をメインステージにしていたため、学校卒業と同時に活動を終了している。

社会参加活動団体では、現在も活動を存続している「青森まちなかしかへらあ〜s」が平成30年度以降本事業への参加を希望しなかった理由は不明だが、団体代表の学生はキャリアサポートワークショップや寺子屋ありす等の活動にも同時に参加していたので、活動が過多となり、優先的にモデル団体研究に参加できる体制が整わなかったことが考えられる。



図10 文学研究 Think With Us

IV 各団体への支援と団体の変容

1 調査対象と検証の手順について

本事業参加のモデル団体のうち、長期に渡って参加を継続している団体は以下の5団体である。

◎平成28年度から令和元年度（4年間）

- ・「キャリアサポートクラブコンソーシアム」
- ・「Lesta」
- ・青森中央高校読み聞かせ隊
- ・L F V～人の可能性を広げる団体～

◎平成29年度から令和元年度（3年間）

- ・確原色

本章では、まずこれらの各団体について、当センターの支援を長期に渡って行ったことからの変容を分析し、個々にまとめる。

さらに、1，2年程度の短期間本事業に参加した

団体（調査不能を除く5団体）についても、支援を受けた後の変容について述べる。

その後全体について述べ、研究仮説の検証について考察する。

調査の方法は、各団体代表者への電話インタビューにより行った。そのうち、支援を長期に渡って行った5団体については、本事業参加当初の代表者および令和元年度の代表者それぞれに対して行い、短期間参加の3団体については参加当初の代表者に対して行った。

2 「キャリアサポートクラブコンソーシアム」への支援と変容

(1) 参加初年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・キャリアサポ各高校企画クルー用の必須研修、リハーサル等の運営
- ・交流を深める行事（自主事業）
- ・スキルアップを図る自主研修（自主事業）

②活動の成果

- ・連合団体として、高校企画に関わる学生の中にリーダーを育成できた

③団体の課題

- ・全体として自主性に欠ける
- ・自主事業に注力したいが余裕がない
- ・キャリアサポ高校企画の常連クルーのみが交流やスキルアップを行う

④本事業からの効果的な支援

- ・研修室や教材開発室の無料使用
- ・発表の場の提供（生涯学習フェア）
- ・社会教育主事等による情報提供とアドバイス

⑤モデル団体となったことでの変化（1年後）

- ・特に変化は見られなかった

(2) 令和元年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・学生団体交流会（自主事業）
- ・ハイ×カレ（高校生対象講座，自主事業）
- ・スポーツ大会での交流（自主事業）

②活動の成果

- ・新企画のハイ×カレを実施できたこと。参加者の感想に「人生が変わって良かった」というものがあった。キャリアサポでつけた

- 力を使って高校生に影響を与えられた
- ・学生団体交流会の中で、それぞれの活動を盛り上げていこうという意欲が見えた

③団体の課題

- ・大学生の受け身の姿勢。キャリアポを他のものに生かせるチャンスを逃している
- ・仲良しだけでまとまってしまう

④本事業からの効果的な支援

- ・研修室や教材開発室の無料使用
- ・地域活動団体、創作活動団体、教育活動団体等との連携に関する連絡調整
- ・協力名義使用の承認

⑤モデル団体となったことでの変化（4年後）

- ・最低限の主体性を持っている
- ・高校生と直接つながる機会を持っている
- ・自主的な活動の幅が広がった



図11 「キャリアサポ連合」・ハイ×カレ

(3) 支援結果の分析

①成果について

現時点で、4年前より、キャリアサポ高校企画に直接関わる活動以外の、自主事業に対する意識が高まっている。特に、高校生対象の新たな講座企画を実施し、連合団体のリーダーは成功の手応えを感じている。リーダー育成はしっかりできている。

②課題について

キャリアサポ高校企画に関わることでそれ以外の活動や生活が向上できると考えるリーダーと、そうは考えていないメンバーとの意識に差がある。組織内の人間関係は、全体が小さな仲良しグループに分かれているが、グループ間の意思疎通が乏しく、全体としての意識の統一感は薄い。意識の統一という点では4年前の方が強かった。団体のまとまり

について助言が必要になっている。

3 「Lesta」への支援と変容

(1) 参加初年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・毎週日曜日の寺子屋ありす
- ・クッキング企画、アート企画等（自主事業）
- ・ワールドカフェ（自主事業）

②活動の成果

- ・大人、学生、子どもの関わりが広がり、異年齢の人との関わり方が身についた
- ・子どもが精神的にも成長した姿が見られる

③団体の課題

- ・寺子屋ありすのスタッフ確保。高校生と責任者の大学生だけが来る日が多く、大学生がなかなか来ない

④本事業からの効果的な支援

- ・研修室や教材開発室の無料使用
- ・情報発信用の専用掲示スペースの設置
- ・社会教育主事等による情報提供とアドバイス
- ・協力名義使用の承認

⑤モデル団体となったことでの変化（1年後）

- ・アドバイスを得て活動の反省点をよく意識した

(2) 令和元年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・クッキング企画、アート企画等（自主事業）
- ・寺子屋
- ・ワールドカフェ（自主事業）

②活動の成果

- ・寺子屋のレクリエーションの種類が増えた
- ・高校生が増えた
- ・大学生が高校生に対してよい影響を与えている

③団体の課題

- ・団体の人数が少ない
- ・自主事業は代表や副代表などレギュラーメンバーだけでの企画になり、他のメンバーの意欲が高まらない

④本事業からの効果的な支援

- ・研修室や教材開発室の無料使用
- ・社会教育主事等による情報提供とアドバイ

ス

- ・協力名義使用の承認
- ⑤モデル団体となったことでの変化（4年後）
- ・お金がかかる企画を実施できている
 - ・アドバイスを受けて、自主事業などが比較的スムーズに進められている



図12 「Lesta」・ワールドカフェ

(3) 支援結果の分析

①成果について

寺子屋ありすの運営に真剣に取り組み、ねらいとする異年齢コミュニケーション体験を重ねることで、参加者のコミュニケーション力が増している。ただし、これは本事業での支援ではなく、寺子屋ありす担当の職員や「Lesta」顧問の支援によるものが大きい。一方、寺子屋ありす以外の自主事業に関しては、本事業担当者からのアドバイスを有効活用し、活動が成功しているという意識をリーダーは持っている。

②課題について

課題については、4年前も現在も、寺子屋ありすに関わるスタッフの人数が少ないという点で変わらない。「Lesta」メンバー募集に関して、寺子屋ありす関係者だけが努力し、本事業担当者はあまり関わってこなかったことが反省点である。メンバー集めに関しては効果的な方法を助言する必要がある。

4 「青森中央高校読み聞かせ隊」への支援と変容

(1) 参加初年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・三陸復興応援での高校生との交流および保

育所での読み聞かせ

②活動の成果

- ・読み聞かせの活動が軌道に乗った

③団体の課題

- ・特に見当たらなかった

④本事業からの効果的な支援

- ・情報発信の専用掲示スペースの設置

⑤モデル団体となったことでの変化（1年後）

- ・他団体と交流することで、異なる活動であっても勉強になっている

(2) 令和元年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・各回ともメンバー全員が行う読み聞かせ活動
- ・大学教授を招いての研修
- ・三陸の幼稚園や児童館訪問
- ・青森聾学校での手話の勉強

②活動の成果

- ・人前に立つ経験が続けたことで、保育士を目指すことに役立っている実感がある
- ・読み聞かせで子どものよい反応が出てきて、意欲が増してきた

③団体の課題

- ・実践活動の機会がもっとほしい。依頼をもらってもなかなか行けないことが多い

④本事業からの効果的な支援

- ・特になし

⑤モデル団体となったことでの変化（4年後）

- ・過去に生涯学習フェアや所報「響」への掲載などあった。今年度それがなくてどうかという、変化はない

(3) 支援結果の分析

①成果について

読み聞かせに出かけた際の取組は、4年前に軌道に乗って以来、生徒たちにとって大変有益な体験となっている。ただし、その部分において、本事業からの支援はほとんど関係がない。会場使用を一度行ったものの、特に効果的なことはなかった。過去、掲示板に活動紹介を貼り出した際に問い合わせがあったことがあり、活動の励みになった。

当センターの研修室利用については、今後必要に応じて希望したいと考えており、掲示板とともに、今後も支援は存続してほしい

と考えている。

②課題について

団体の読み聞かせ活動自体は順調で、依頼を受けても日程が合わずなかなか行くことができないことを除いては問題はない。

一方、本事業に関しては、他団体との交流が令和元年度中にできなかった（モデル団体代表者会議にも参加できなかった）ことで、何も得るものがなく、団体として残念に思っている。この団体にとって本事業に参加することは読み聞かせ体験以外の勉強の場であるが、それができず、不満足と考えている。また、県内の他の読み聞かせ団体の情報が得られる支援も望んでいる。

今後これらの希望に応える作業が必要である。



図 13 「青森中央高校読み聞かせ隊」

5 「L F V」への支援と変容

(1) 参加初年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・青森大学構内での宝探しイベント
- ・わくわく広場での雪遊びイベント
- ・子ども関係の他団体との交流

②活動の成果

- ・活動を行う大学生自身が楽しむことができ、その効果で子どもたちが楽しんでくれた
- ・学生生活が楽しく意義あるものになった

③団体の課題

- ・大学構内でのイベントでの子どもの怪我を大学職員が心配していた。それらの解消のため、救急や傷害保険の講習を受けたり、

自然体験指導者の資格を取得したりした

④本事業からの効果的な支援

- ・情報発信の専用掲示スペースの設置
- ・社会教育主事等による情報提供とアドバイス

※「キャリアサポートクラブコンソーシアム」主催の学生団体交流会への参加で、自分たちの活動発表ができたのがよかった

⑤モデル団体となったことでの変化（1年後）

- ・活動自体の数が増えた
- ・他団体の学生とのつながりができ、学生団体交流会で出会った「Lesta」やキャリアサポのメンバーが青森大学まで手伝いに来てくれた

(2) 令和元年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・春の鬼ごっこ企画（約 50 人）
- ・夏の水であばれるの会（親子約 40～50 人）
- ・青森大学で 2 年生主催の親子向けハロウィンイベント（親子約 40 人）
- ・幸畑ねぶた祭りボランティア（屋台の手伝い）
- ・アスパムクリスマスマーケットで棒パン販売と松ぼっくりクラフト体験

②活動の成果

- ・2 年生の主催イベントの開催ができて、次代のメンバーに責任感が出てきた

③団体の課題

- ・2 年生の加盟者が多いため、同学年の中での意欲面での差が見られることが今後の課題である

④本事業からの効果的な支援

※「キャリアサポートクラブコンソーシアム」、「Lesta」がそれぞれ主催する、学生団体交流会、ワールドカフェに参加できた学生が交流を深めることができた

⑤モデル団体となったことでの変化（4年後）

- ・他団体（「Lesta」等）メンバーに L F V の活動の様子を知ってもらえている
- ・他団体の学生と Facebook で繋がっているため、主催イベントの告知を通して、多くの人に L F V の活動が知られている

(3) 支援結果の分析

①成果について

団体の活動内容や参加者の人数に非常に手応えを感じており、創設者の意志を次代に受け渡せるようになっていて充実している。

本事業での支援については、支援項目にはないが、学生団体交流会・ワールドカフェなどに参加することで自分たちの活動が価値あるものとして紹介できることができ、喜んでいる。

②課題について

活動の規模に対して団体登録メンバーの数が多すぎる課題はあるが、それ以外はない。団体創設の元々の意図が、青森大学内の数ある学生団体がうまく活動できていないため、自分たちがよい活動をやってやりたいというものだったので、今後、順調な活動の様子を伝えられるだけ伝えたいと考えている。

そのため、今後の支援としては、LFVの活動を広く周知することをしっかり行いたい。

6 「確原色」への支援と変容

(1) 参加初年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・合同文化イベント「確原色」(3月・8月)
- ・マイプロジェクトアワードでの発表
- ・クラウドファンディングで活動助成を受けること

②活動の成果

- ・県の事業であるモデル団体に指定されたことが、団体の後ろ盾となった。その関連からか、新聞やテレビニュースで取り上げられ、青森市長も参加するイベントになった
- ・練習場所が確保できるのが大きい

③団体の課題

- ・認知度がまだまだ低い
- ・自団体のことを知らない大人には活動の趣旨が誤解されている

④本事業からの効果的な支援

- ・研修室や教材開発室の無料使用
- ・情報発信用の専用掲示スペースの設置
- ・社会教育主事等による情報提供とアドバイス

⑤モデル団体となったことでの変化(1年後)

- ・設備の整った、本物の「スタジオ」で練習できるため、参加者の意欲が高まる
- ・ちゃんとした団体として認められたことでニュースで取り上げられるなど、よいことがあった

(2) 令和元年度の団体の様子と課題

①注力していた活動

- ・合同文化イベント「確原色」(3月)に向けた準備

②活動の成果

- ・3月のイベントに向けた準備の中で、自分たちの企画力を伸ばすことができた
- ・イベント運営等の経験を学校の文化祭展示にも生かすことができた



図14 「確原色」

③団体の課題

- ・メンバー間でのやりとりが少ない
- ・イベント内容のアイデアを共有できなかったり、アイデア自体が浮かばない

④本事業からの効果的な支援

- ・研修室や教材開発室の無料使用
- ・情報発信用の専用掲示スペースの設置
- ・協力名義使用の承認

⑤モデル団体となったことでの変化(4年後)

- ・モデル団体になってイベントがきちんと企画され、成功していると感じる
- ・資金集めに苦労しなくてもすむ
- ・他団体との交流ができる

(3) 支援結果の分析

①成果について

チケット販売のあるイベントを企画しているが、年2回のを1回に整理し、資金

の悩みを解決。現時点で、4年前より準備の進め方が整理され、無駄がない。当センターの後ろ盾を得て、きちんとした団体として次第に認知されるようになり、活動しやすくなった。モデル団体に参加した当初、当センター職員から受けたアドバイスが今に生きている。

②課題について

先輩から見て後輩メンバーが意欲的に企画を話し合う姿が見られず物足りなさを感じている。通り一遍の企画はできるようになったが、イベントの新たなアイデアに恵まれない。学生が自分たちでアイデアを出さなければ意味がない活動であるだけに、当センター職員が企画内容へのアドバイスをするのでなく、他団体とのコラボレーションから新たなアイデアが生まれるような、連携のアドバイスを積極的に行いたい。

平成28年度から令和元年度の支援について、前掲の事業実施要項(図2, 3)における「モデル団体への対応」の項目中、当センターがモデル団体に対して行う支援が示されている。図2においては7項目、図3においては8項目がある。これらの項目(以下「支援項目」と呼ぶ)と、各団体が本事業に参加する理由との関連について次表のようにまとめた。(表5)

表中、最も多い理由は「無料で研修室利用」で、全体の3分の1がこの理由を挙げていた。細かな理由としては、「学校以外で活動したい(しなければならない)から」「費用がかからないことが大事だから」「きちんとしたスタジオ施設を使いたかったから」であった。

次に多い理由は「他団体とのネットワーク作り」「団体の認知度アップ」であった。続いて「地域とのネットワーク作り」で、ここまでが複数の団体が挙げた理由である。

7 1～2年間参加した団体の変容

(1) 学生インタビュー団体 WAO!!

モデル団体となったことでの変化

- ・活動内容の変化はないが、利用しているホームページサーバの不調などで本来の情報発信ができないときに、センターの掲示板を利用でき、情報発信が継続できた

(2) 田中の彼方

モデル団体となったことでの変化

- ・演奏機会が増えて、技術が向上した

(3) アザラシ

モデル団体となったことでの変化

- ・キッズフェアで発表の場を得たり、スタジオを借りられたりということで、しっかり活動しようという意識が強く働いた

※その他の団体については、アンケート調査ができなかったり、活動が短期間で変化が分からなかったりして、回答が得られなかった

表5 モデル団体研究事業に参加した理由

(面接時記録および追調査より 全17団体)

参加の理由 (参加初年度の理由。 複数回答あり)	団体数	関連する支援項目
無料で研修室利用	6	・研修室使用料の減免 ・ミーティング等を行うスペースの用意 ・運営会議・研修・作業等での教材開発室の使用承認
活動発表をHPで紹介したい	1	・所報「響」やHP等での活動状況の紹介
活動時に大人の後ろ盾がほしい	1	・協力名義使用の承認 ・社会教育主事等による情報提供とアドバイス
地域とのネットワーク作り	2	・地域活動団体、創作活動団体、教育活動団体等との連携に関する連絡調整
他団体とのネットワーク作り	3	・地域活動団体、創作活動団体、教育活動団体等との連携に関する連絡調整
団体の認知度アップ	4	・情報発信用の専用掲示スペースの設置 ・所報「響」やHP等での活動状況の紹介
活動に関する情報を得たい	1	・社会教育主事等による情報提供とアドバイス

V 支援の在り方の分析

1 参加団体が本事業に求めるもの

参加理由として1団体ずつのみ挙げている項目は「活動発表をHPで紹介したい」「活動時に大人の後ろ盾がほしい」「活動に関する情報を得たい」

である。

以上のことから、高校生・大学生たちには、以下のような考えや希望があると推察される。

- ・ 安価な活動場所が必要である。
- ・ 他の学生団体との交流が有益である。
- ・ 活動する地域や連携する地域組織が必要である。
- ・ 世間に広めたいメッセージや、重要性を認めてもらいたい活動がある。
- ・ 活動内容向上のための情報や活動しやすい環境づくりを望む。

一方、当センターが用意した支援項目の中に、参加団体の意識として「利用する想定がない」ものが一項目あることが分かる。それは「発表の場の提供（生涯学習フェア等）」である。

このことについては、後の「3 効果を感じない支援」でも触れるが、実際に生涯学習フェアやキッズフェア等当センターのイベントに出演したり、ブース出店したりした団体は複数存在するにも関わらず、この「発表の場の提供」という支援は重要視されていないことが分かる。つまり、

総合社会教育センターとは、自団体の活動のための「準備、練習の場」「勉強の場」である、という意識であり、社会参加する場ととらえている青少年団体は少ない

ということである。このことは、今後の本事業を展開する上で十分留意しなければならないと考える。

2 各団体が効果を感じた支援

支援項目について「自団体の活動の推進を図る上で効果が感じられた支援は何か」という意識調査をした結果を次表のようにまとめた（表6）。

この調査は11団体に行ったが、そのうち複数年度に渡ってモデル団体に参加した5団体について、参加初年度時の代表者と最新の代表者とのそれぞれに調査を行った。5団体とは「キャリアサポートクラブコンソーシアム」、「Lesta」、「青森中央高校読み聞かせ隊」、「LFV」、「確原色」である。なお、調査不能だったのは17団体中6団体であった。

最も多い回答は1の「研修室使用料の減免」を始めとする無料で活動場所を提供する支援に関するものであった。これは、前項「1 本事業に求める

もの」の調査と同様の結果である。

表6 活動の推進を図る上で効果を感じた支援項目

（電話アンケート回答数 11団体、15名 複数回答あり。6団体については調査不能）

1	研修室等使用料の減免、ミーティング等を行うスペースの用意、運営会議・研修・作業等での教材開発室の使用承認	9名
2	社会教育主事等による情報提供とアドバイス、地域活動団体、創作活動団体、教育活動団体等との連携に関する連絡調整	7名
3	情報発信用の専用掲示スペースの設置	6名
4	所報「響」やHP等での活動状況の紹介	2名
5	協力名義使用の承認	2名
6	発表の場の提供	2名

2番目は2の社会教育主事等からのアドバイスや、他団体との連携に関するものであった。この2つの項目をまとめた理由は、団体に対するアドバイスのほとんどが「サークル交流会やワールドカフェに参加した方がよい」「協力してくれる団体の候補がある」「興味深い研修会を企画しているところがある」など、他団体との連携に関する情報提供であることが調査から分かったからである。この支援に対し「感謝している」という回答も複数あった。

3番目は3の「情報発信用の専用掲示スペースの設置」。具体的な回答として「掲示板を見たという反響の声が寄せられた」「自分たちのHPの更新ができなかったときにありがたかった」などがあった。

一方、4番目以降の3つの項目は、効果ありと答えた人の数が上位と比較してかなり少なかった。理由の一つは、この3項目のうち、2項目は実際の支援がほとんど行われていないものであるからである。それは、4の「所報『響』やHP等での活動状況の紹介」、5の「協力名義使用の承認」である。

4について触れた回答には「『響』に掲載されたが、その反響は分からない」などとあり、効果を感じられなかった人がいたことが分かった。ただし、

「響」「HP」については、担当者が積極的に数多く掲載していない

という反省もある。その点は改善し、PRに努める必要がある。

また、「協力名義使用の承認」については、申請する団体が少ないことが一因と思われる。平成30年度、令和元年度合わせても申請は4団体しかなかった（「Lesta」、「キャリアサポートクラブコンソーシアム」、ASC、ゆめびと育成プロジェクトチーム。平成29年度以前は資料なし）ことから、協力名義使用の効果をよく知らない団体が多いと考えられる。

「発表の場の提供」については、次項で述べる。

3 各団体が効果を感じなかった支援

表3の「発表の場の提供」についても、効果があると回答したのは2名だけであった。前項「1 本事業に求めるもの」でも述べたが、各モデル団体とも、本事業に参加するにあたり発表の場を提供してもらおうという意識が薄かったと思われる。

実際は毎年のように生涯学習フェア等に参加し、来場者と触れ合っている団体があるのにも関わらず、このような結果になったのは、どういうことか。その理由を述べるならば、

総合社会教育センターという施設においては、各団体が最も希求している「社会への参加」「創作物の発表」の機会を、分かりやすく提供できていない

ということになるだろう。先ほどの「響」「HP」の場合とは違い、物量ではなく提供メニューの形や質が、高校生・大学生のニーズには合っていないということになる。この点が改善されれば、本事業が各団体に与える影響は大きなものになるはずである。

ちなみに、「確原色」は、参加当初から3年間、リハーサルでは当センターを使っているが、実際のイベント本番では、当センターは使用していない。

また「キャリアサポートクラブコンソーシアム」においては、団体としての活動数、メンバー個々の活動量ともに非常に多いが、当センターを使用している活動は割合として非常に少ない。

さらに、令和元年度当センターにおいて、自らが子どもや一般高校生を集めて活動を行っているような団体は、結果的に2団体しかない（「Lesta」、ゆめびと育成プロジェクトチーム）のである。

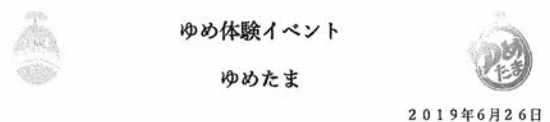
この点について、社会教育施設としての機能をさ

らに向上させる取組を考えていく必要がある。そのヒントになる活動について、次項で紹介したい。

4 新たな活動を生み出す支援

令和元年度は、モデル団体に指定されることで新たな活動が開始された団体が2つあった。「ゆめびと育成プロジェクトチーム」および「文学研究 Think With Us」である。

支援は始まったばかりなので、次章における支援効果の検証対象には当てはめないが、この2団体に対し、社会教育施設としての対応をさらに検討していく必要があると考えたため、現在の支援について以下のとおり報告する。



1. 目的
夢に向かって頑張っている人「ゆめびと」が、参加者に夢について語るなどの体験型ワークショップを行い、参加者が夢について考えるきっかけを作り、夢や目標を持つことの良さを知ってもらう。また、ゆめびとやスタッフ自身が参加者との交流を通し夢についての意識を高め改めて考える。
2. 対象者
小中学生（保護者同伴可、小中学生以外も受け入れは可能）
3. 日時
8月15日 13:00～16:00（準備片付け含め10:00～18:00）
4. 場所
青森県総合社会教育センター 3階 第一多目的研修室、調理室、和室
5. 内容
参加費無料。入場自由。ゆめびとごとに各ブースに分かれ、語りなどを交えた体験型ワークショップを行う。

ねぶた師のたまご	ねぶたの技法を使ったしおりづくり
絵本作家のたまご	ミニ絵本作り
プログラマーのたまご	プログラミング体験
研究者	簡単な実験
イラストレーター	キャラクターデザイン
教師	テストづくり・採点
介護士	介護・高齢者体験

図15 令和元年度ゆめたま実施要項

「ゆめびと育成プロジェクトチーム」のメイン活動は、「ゆめ体験イベント ゆめたま」という、小中学生向けの職業体験イベントである（図15）。このイベントを実施するにあたり、本事業の支援として、当センター研修室教室の無料提供と、協力名義使用承認とを行った。このイベントの特徴は、参加する子どもたちを「ゆめびと」と呼ぶこと、および各体験メニューを与えるのが県内の大学生たちであることである。体験させる道具や教材も手作りの物が多く、アイデアにあふれている。参加費は無

料で実施しており、活動経費については、代表が所属している大学の、学生が応募できる助成金制度を利用し、収入を得ている。

このイベントを実施した「ゆめびと育成プロジェクトチーム」は、別のモデル団体である「Lesta」のメンバーが新たに発足したものである。「Lesta」は毎週1回日曜日、定期的に当センター内で集まりを持っており、本事業の趣旨や内容についても従前から詳しい知識を持っていた。そのため、新団体を発足するにあたり、モデル団体の指定を受けることを前提に準備を進めていたものである。

「文学研究 Think With Us」は、令和元年10月末に設立総会を当センターで開催して以来、週1回のペースで、会員用の定例文学研究会を当センター研修室で実施している。毎回6名ほどが参加し、その会のテーマとなる小説家や詩人などの文学者について、生い立ちから文学活動に至る経歴、思想などを詳細に調べて報告し、さらに代表作を全員で鑑賞している。研究の記録については、当センター隣接の県立近代文学館内において今後展示・発表する計画を学生自身が主体となって進めている。

この団体の設立にあたっては、学校外での研究活動を希望していた県立青森南高等学校の生徒に本事業への参加を呼びかけ、当センターを使用しての活動の見通しを持ってもらったり、会則作りについてアドバイスを رفتりした経緯がある。

これらの事例は、当センターの支援が新たな活動の創出に寄与する可能性を示したものであり、今後こうした支援について継続・充実させていくべきであると考えられる。

VI 考察とまとめ

1 分析の整理

「V 支援のあり方の分析」において個々の団体毎に分析した結果をまとめた。まとめてみると、変化の観点として、「活動の成立」「意識への影響」という2つの種類に分類することができた。(表7)

(1) 「活動の成立」の観点から

① 3～4年の支援を行った団体 (5団体)

「支援を受けての成果」で全ての団体にあて

はまる共通点は見当たらなかったが、「活動の成立」という観点では、次のア・イの2種類に分けることができる。

「支援を受けての成果」で全ての団体に当て

ア 支援が活動の成立に関与している

・「キャリアサポートクラブコンソーシアム」

・「Lesta」

・「確原色」

イ 支援は活動の成立には関与していない

・「青森中央高校読み聞かせ隊」

・「L F V」

アの3団体に共通しているのは、施設使用料の減免支援を用い、いずれも当センターに活動の基盤を持っていることである。その上で協力名義使用承認や当センター職員によるアドバイスの支援により当センターの後ろ盾を得ることで自主事業等の活動を成立させている。

つまり、この3団体のようにモデル団体研究事業における支援が大きく貢献し、活動の成立に至った団体があるといえる。

それに対し、イの2団体に共通しているのは、他団体との交流を求めて本事業に参加しているという点である。実際に交流が行われた「L F V」の場合は他団体からの人的な協力を得てイベントを行い、令和元年度の交流機会に参加できなかった「青森中央高校読み聞かせ隊」は、本事業による支援の効果を感じていない、という結果となった。

つまり、支援がなくても活動が成立する団体は、他団体との交流を求めてモデル団体研究事業に参加しているといえる。

さらに、イの2団体はいずれも、情報発信用の専用掲示スペースの設置支援が効果的であると回答している。さらに「L F V」はSNSを利用した情報発信を積極的に行っている。

これらのことから、支援がなくても活動が成立する団体は他団体より情報発信に価値を見いだしているといえる。

② 1～2年の支援を行った団体 (3団体)

短期間参加の3団体に特徴的なのは、3～4年の長期間参加している団体とは異なり、当センター職員によるアドバイスや他団体との交流はそれほど効果的とは考えていない、ということである。

表7 分析の整理

期間	種別	団体名	支援を受けての成果	変化の観点 分類1 「活動の成立」	変化の観点 分類2 「意識への影響」	有する課題と今後の支援
3～4年の支援	社会参加活動	キャリアサポートクラブコンソーシアム	団体として自主性が高まり、新たな自主事業を生み出すことができた 【主な支援：協力名義使用承認】	支援が活動の成立に大きく貢献	自主性が高まり成功につながった	団体内で、意識の統一がなされるよう、まとまりを生む支援が必要
		Lesta	寺子屋、自主イベントの成功 【主な支援：社セ職員の助言】	支援が活動の成立に大きく貢献	支援に強く支えられた	活動量に対するメンバー不足の解消、メンバー集めへの支援が必要
		青森中央高校読み聞かせ隊	特になし。支援を受けなくても順調 【支援不要】	他団体交流と情報発信を求める	交流で意識向上	他団体との交流を図る機会に参加できる支援が求められている
		LFV～人の可能性を広げる団体～	他団体との交流から、連携や協力を得た 【主な支援：他団体交流の連携調整】	他団体交流と情報発信を求める	交流で意識向上	より団体の活動成果を広く伝達する支援が求められている
	創作活動	確原色	活動方法の整理ができ、スムーズに活動を継続できている 【主な支援：活動場所確保、協力名義使用承認】	支援が活動の成立に大きく貢献	支援に強く支えられた	イベントのアイディア創出の支援が必要
1～2年の支援	社会参加活動	学生インタビュー団体 WAO!!	停滞した広報活動を補完できた 【主な支援：掲示板・HPで情報発信】	支援が活動の成立を補助	支援で目的達成	
	創作活動	田中の彼方	演奏機会が増え、演奏技術が向上した 【主な支援：活動場所の確保】	支援が活動の成立を補助	支援で目的達成	
		アザラシ	環境が整い、活動姿勢を正すことができた 【主な支援：活動場所の確保】	支援が活動の成立を補助	支援で目的達成	

3団体のうち、創作活動の2団体は、活動場所を無料で確保できるという支援で、活動量が増えたり、活動姿勢がよくなったりという成果が現れている。また、社会参加活動団体の「学生インタビュー団体WAO!!」については、独自にHP上で情報発信するという活動の基盤となる作業を、掲示板による情報発信という支援が補完し、活動が継続できたという成果である。

つまり、これらの3団体のように、短期間モデル団体研究事業の支援を受ける団体には、その支援が、活動の成立を補助する役割を果たしたといえる。

これらをまとめると、「活動の成立」の観点では、次の3種類の変化があったといえる。
 ア 支援があるため、活動が成立した
 イ 支援なしでも活動が成立している団体
 ウ 支援が、活動の成立を補助した

(2) 「意識への影響」の観点から

① 支援が活動の成立に大きく貢献した団体

(1) の分析から、支援が活動の成立に大きく貢献した団体のうち、「キャリアサポートク

ラブコンソーシアム」は「自主事業の成功の手応え」を成果としてとらえ、「Lesta」および「確原色」は「支援から物心両面で支えられ活動が成功した」ということを成果としてとらえている。

つまり、支援の結果、自主性の高まりがあり、その結果新たな成功を収めた団体があった。また、支援に強く支えられて、予定の活動ができた団体があったといえる。

②他団体交流と情報発信を求める団体

(1)の分析から、他団体交流および情報発信を求める2つの団体は、もとより自分たちの活動に自信を持っており、他団体と交流してその活動の様子を情報発信できることを喜び、今後の活動の盛り上げにつなげたいと考えている。ただし、青森中央高校読み聞かせ隊は、令和元年度にそれができず、喜ぶことができていない。

このことから、活動に自信を持つ団体は、外部との交流でさらに自信を深めようとするのがわかる。

③支援が活動の成立を補助している団体

(1)の分析から、支援が活動の成立を補助している3つの団体は、①の「Lesta」および「確原色」に比べると、自分たちの目的を果たすための手段をある程度自前で持っており、支援により補助されながら、当初の目的を達成し、達成したことを喜んでいる。

つまり、支援により多少の助けを得て、当初の目的を達成し、喜んだ団体があったといえる。

これらをまとめると、「意識への影響」の観点では、次の4種類の変化があったといえる。

- ア 自主性が高まった（1団体）
- イ 支援に強く支えられた（2団体）
- ウ 当初の目的が達成されてよかった（3団体）
- エ 交流で意識を高めたい（2団体）

(3)「有する課題と今後の支援」について

①支援が活動の成立に大きく貢献した団体

(1)の分析から、支援が活動の成立に大きく貢献した3団体は、いずれも団体内部の組織

的な活動能力についての課題を有している。その課題は、これまでの支援内容「社会教育主事等による情報提供とアドバイス」に関連する部分である。

あくまで各団体の自主的な活動を推進していくのが本事業の趣旨であるが、これら3団体は支援が活動の成立に関わる団体であるので、今後、個々に持つ課題が活動の成立を妨げることに結びつかないように、アドバイスする必要があるといえる。

②他団体交流と情報発信を求める団体

(1)の分析から他団体交流と情報発信を求める2つの団体は、活動の成立を妨げるような内部の課題は今のところ持っていない。そのため、現在のニーズである、他団体交流と情報発信の支援がこれまで以上に与えられるように策を講ずる必要があるといえる。

2 研究仮説の検証

1を受け、研究仮説についての検証をまとめる。

(再掲) 2 研究仮説

総合社会教育センターが、高校生・大学生等を中心に社会参加活動・創作活動を行っている団体をモデル団体に指定し、永続的に可能な方法で活動の支援を行うことにより、当該モデル団体の活動意欲が増進され、活動が活性化される。

本事業によって各モデル団体が持ち得た意識は、前項2(2)の整理により次の4種類であった。

- ア 自主性が高まった（1団体）
- イ 支援に強く支えられた（2団体）
- ウ 当初の目的が達成されてよかった（3団体）
- エ 交流で意識を高めたい（2団体）

以下、仮説の「活動意欲」「活性化」について、個々に考察する。

アについて。「キャリアサポートクラブコンソーシアム」は、本事業の支援により、自主的な活動の経験が積み重ねられ、自主性が増したことで、新たな自主事業を展開できるようになった。自主性が増したことを「活動意欲」ととらえ、それが増進したために、活動が活性化されたと考えられる。

イについては、「Lesta」と「確原色」の2団体であった。この2団体は、自身の目的に向かう途中で、本事業により物心両面の支援を受け、活動が成立できたという事例である。支援がなければ活動が成立しないともいえるので、この事例は「活動の活性化」というより「活動の成立」が正確な述べ方になるが、精神的な支えもあって活動自体が推進し、望むべき結果に結びついたというよい成果が現れているので、このイの事例も仮説に概ねあてはまる、と考えられる。

ウについては、支援が活動推進の後押しとなったのではなく、支援が目的達成を多少援護した、という事例である。この支援がなかった場合、団体の活動がどうなったかについては検証できないが、支援による活性化の影響は各団体毎に現れている。ただし、「活動意欲」に資する効果は、3団体のうち「アザラシ」にのみはっきり現れているのみである。

以上のことから、

検証対象の9団体のうち、活動意欲の増進から活性化した団体が2団体、なんらかの形で活性化した団体が5団体あり、計7団体について研究仮説があてはまる

といえる。

さて、エの2団体、「青森中央高校読み聞かせ隊」と「LFV」については、支援を受けた結果の意識ではなかった。端的にいうと、これは研究仮説で述べる姿にはあてはまらない。

また、「他団体との交流」は、本事業による直接の支援内容ではなかった。本事業の関わりは、学生団体交流会やワールドカフェをそれぞれ主催する「キャリアサポートクラブコンソーシアム」と「Lesta」に対しての連携の調整ができる、という点である。つまり、

検証対象の9団体のうち2団体については、研究仮説はあてはまらないが、モデル団体研究事業への参加は有益であると考えている

といえる。

3 まとめ

2までを受け、以下のとおり結論をまとめる。

結論

青少年が行う社会参加活動・創作活動の団体に対し、永続的に可能な方法で支援を行うことにより、活動意欲を増進させたり、活動自体を成立させたりすることで、団体の活動を活性化する場合が多い

VII 研究を終えて

以上の研究結果をふまえ、以下を提言したい。

支援内容を再検討した上で、青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業における各団体への支援は、今後も継続すべきである

- 具体的に以下の点を再検討し、今後の支援を充実させ、各団体の発展に協力するべきであると考えます。
- ・当センターが設定できる社会参加場面や活動紹介場面を分かりやすく提供すること
 - ・団体間交流の機会について情報提供数を増やすこと
 - ・団体の各課題に対する適時の助言を積極的に行うこと

研究結果のとおり、本事業の成果が現れたことで、人財育成や社会教育の振興にも寄与しているといえることから、これまで複数年に渡り本事業での研究にご協力いただいた各モデル団体および関係者の方々に心から感謝し、以上のように各団体への支援の継続を提言するものである。

〈引用・参考文献〉

- ・青森県総合社会教育センター条例
- ・社会参加活動モデル団体研究事業要項（平成27年）
- ・青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業実施要項（平成28年）
- ・2019年度（令和元年度）青少年社会参加活動・創作活動モデル団体研究事業実施要項（令和元年）

実践を踏まえた今後の人財育成の在り方

～青森で生きる未来人財育成事業の実践から～

教育活動支援課 社会教育主事 高橋 孝次

要 旨

青森県総合社会教育センターでは、重点事項の一つに人財育成を掲げ、「地域を支える人財の育成」「次代を担う青少年の育成」を使命としている。青少年の体験活動の充実を図る事業はこれまでも実施してきたが、平成30年度からは「青森で生きる未来人財育成事業」として行ってきた。これは、青少年の自己肯定感や主体性を高めるため、講座と演習活動（寺子屋）を実施し、実施自治体において、青少年が地域活動に参加する仕組みづくりを行う事業である。

本稿では、まず当センターの青少年の人財育成事業のこれまでの沿革を踏まえ、現在の仕組みづくりに至った経緯、成果と課題、県内自治体へのアンケート結果等を整理した。さらにこの事業への参加者と受入れ施設のアンケート結果、県内40市町村に送付した「青少年対象の事業に関するアンケート」の結果を分析した。

その結果、当センターがこれまで開催した演習活動（寺子屋）は参加する中学生・高校生の満足度が高いだけではなく、受入れ施設にとっても満足度が高く、今後もニーズが期待できることがわかった。また、県内市町村では新たな試みとして中学生・高校生を放課後子ども教室等に派遣する仕組みができた場合には実施するニーズがあること、その場合当センターが担うべき役割などが明らかになった。

これらの結果を基に、高校生・大学生を対象とした人財育成に関する一つのモデルプランを作成し示すこととする。

キーワード：青少年，人財育成，寺子屋，高校生・大学生

目 次

I	はじめに	28
II	前身事業「未来の青森県を担う若人育成講座」について	29
III	現行事業「青森で生きる未来人財育成事業」の概要	31
IV	現行事業の取組	31
V	青少年を対象とする事業について市町村の動向	44
VI	モデルプラン	48
VII	仮説の検証	49
VIII	終わりに	49

I はじめに

我が国の総人口は年々減少しており、総務省統計局によると平成30年の総人口は1億2664万3千人で8年連続減少している。また、15歳未満の年少人口割合は12.2%で過去最低となっている。

では、青森県の状況はどうか。統計分析課によると平成30年人口は126万2千人で、青森県の総人口に占める年少人口の割合は10.8%と全国平均を下回っている。このことは、未来を担う青少年の育成に少なからず影響を与えるものと考えられる。

表1 本県の青少年人口等の推移

(単位:千人、%)

	青森県の総人口	青少年人口	総人口に占める 青少年人口の割合
平成26年	1,321	154	11.8
27年	1,308	148	11.4
28年	1,293	144	11.2
29年	1,278	140	11.1
30年	1,262	136	10.8

また、集団の中で自己を確立し、連帯の心を身に付けていく上で、青少年団体が果たす教育的役割は大きく、子ども会はその代表的な組織の一つである。青森県における子ども会の加入者は年々減少しており、平成30年度は加入者数27,098人と7年前の約2/3にまで減少している。

表2 本県の子ども会加入状況の推移

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
加入者数 (人)	41,078	39,315	36,533	34,272	32,624	30,869	28,974	27,098

少子化と共に進む核家族化の進行、子ども会などの集団での活動が少なくなっていく中で、子ども同士の関わりが希薄になったり、地域で一定の規模での集団活動が困難になってきていることは、子どもたちがごく自然に自分以外の「他者と関わる」場所、機会をますます喪失させることを意味し、希薄な人間関係を生じさせる一因となる。

また、子ども会という異年齢集団の加入者減少は、青少年が仲間と共に課題を達成していく体験を通じて、積極性や主体性を発揮し自信をつけていく機会を奪うことにも繋がっていると考えられる。このことは、青森県が2年ごとに行っている「青少年の意識に関する調査」からも見ることができ、自尊心について「あなたは自分のことが好きですか」とたずねた質問に、全体で「好き」という回答が16.3%、「どちらかといえば好き」という回答が42.3%となり、肯定的な回答は58.6%であった。多感な少年期であり悩みが多い時期ではあるが、青少年の約半数が自分を否定的に捉えているといえる。

このような中、県では「青森県基本計画 未来を変える挑戦」において「あおもりの未来をつくる人財の育成」を重要政策の一つに位置づけ、子どもたちがふるさとあおもりに対する誇りと愛着を持ち、新しい価値を創造する力や国際感覚を身に付け、多様性を認め、人権を尊重し、心身ともに健康で自立した人財として成長するよう、学校・家庭・地域が連携・協働して取り組みを推進している。

青森県総合社会教育センター（以下当センター）では「次代を担う青少年の育成」のため平成30年度から、「青森で生きる未来人財育成事業」を行っている。この事業では、青少年が地域活動に参加し成長する仕組みづくりを行い普及定着を目指すことを目的にモデルとして、3市1町で開催してきた。その成果から、「各地域の青少年を地域活動に参画させることで、郷土愛が深化し、生きがいややりがいをもつ人が増え、明るい地域づくりに繋がるのではないか」という仮説を基にモデルプランを作成することとした。

本稿では、青少年事業のこれまでの沿革を踏まえ、現在の仕組みとなった経緯、成果と課題、課題と県内自治体へのアンケート結果から、当センターの今後の人財育成事業のあり方に関する一つのモデルを示すものとする。

青森県では、“人は青森県にとっての「財(たから)」である”ことを基本的な考えとしており、本稿では「人材」を「人財」と表記する。

II 前身事業「未来の青森県を担う若人育成講座」について 平成24年度～平成29年度

1 平成24年度～平成27年度

学校や地域活動でリーダー的な役割を担っている中高校生を対象に、自主性やリーダーの資質をさらに高めるために、地域の課題を見つけ、自分の良さや思いを生かした活動に取り組む若人を育成することを目的に実施された。

ア 平成24年度

(ア) 対象地域 中南地域

(イ) 受講者数 29人

(ウ) 講座内容 計7回の講座と実践活動

イ 平成25年度

(ア) 対象地域 東青・下北地区

(イ) 受講者数 53人

(ウ) 講座内容 計7回の講座と実践活動

ウ 平成26年度

(ア) 対象地域 上北・三八地区

(イ) 受講者数 53人

(ウ) 講座内容 計7回の講座と実践活動

エ 平成27年度

(ア) 対象地域 西北地区

(イ) 受講者数 23人

(ウ) 講座内容 計7回の講座と実践活動

オ 平成24～27年度の成果と課題

平成24年度から27年度まで実施した中で中高校生の自己理解や地域理解が進む成果が得られた一方、講座や実践活動が単発イベントになりがちで、日常的な活動に結びつかないという課題があった。

2 平成28年度～平成29年度

これまでの成果と課題を受け事業目的を、「青少年が自己肯定感を高め、主体的に行動できるようにするため、異年齢集団における活動を通して、他者と協力し、相互に学び合う講座と演習を実施すること」に見直し、そこで日常的な活動の場として継続的な異年齢交流の場を「青少年異年齢交流モデル事業」（寺子屋）として立ち上げた。

これにより、講座は「未来の青森県を担う若人育成講座」、演習活動は「青少年異年齢交流モデル事業」（寺子屋）という仕組みとなった。

(1) 平成28年度

ア 未来の青森県を担う若人育成講座
全7講座を実施した。

表3 未来の青森県を担う若人育成講座内容

第1講座	コミュニケーション能力を高める講座
第2講座	自分や仲間の良さを知る講座
第3講座 (1泊2日)	地域の実践活動を体験し、仲間と企画を立てる講座
第4講座	地域実践活動を企画する講座
第5講座	地域実践活動を準備する講座
第6講座	地域実践活動を実行する講座
第7講座	地域実践活動を振り返る講座

イ 青少年異年齢交流モデル事業(寺子屋)

異年齢交流が青少年の成長に大きな効果を発揮するには、親や先生とのタテの関係、友達同士のヨコの関係だけではなく、小学生から見ると中学生・高校生、中学生から見た高校生、高校生からみた大学生というナナメの関係が有効に機能しなければならない。いずれも、年上だから頼もしく、年齢が近いから親近感を感じ、近い将来の自分と重ねることができる。意図的に異年齢集団を形成し青少年の育成を図るため、高校生・大学生が組織的に活動に参加することが欠かせない。

また、モデル事業としてノウハウを蓄えるため県内2カ所で開催することとした。

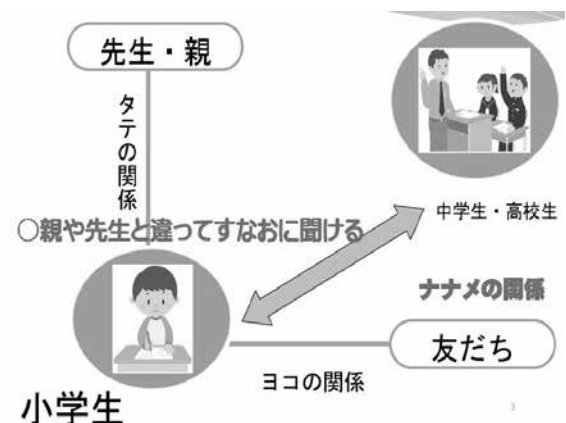


図1 ナナメの関係

・青森会場：寺子屋ありす

青森会場では、高校生・大学生を中心に社会参加活動・創作活動を行うモデル団体として連携していた「Lesta（レスタ）」の協力のもと、寺子屋を進めることとした。活動場所は、当センター1階にあるインフォメーションプラザありす奥のスペースとなる。活動場所の名前から寺子屋ありすと名付けられた。前半2時間を勉強タイムとし、小・中学生が持参した宿題等を大学生・高校生と一緒に取り組む。“教える”のではなく、“見守り寄り添う”ことを基本姿勢としている。その後、後半2時間を交流タイムとし、ドッジボールやイス取りゲーム、夏場は畑作業など高校生・大学生が考えたレクリエーションを実践してきた。

・黒石会場：寺子屋サンサン

黒石市での活動場所は、黒石東小学校向にある黒石東公民館となる。太陽がキャッチフレーズの黒石東小学校の児童が中心となることから、名称を寺子屋サンサンと名付けた。寺子屋ありす同様、前半2時間を勉強タイム、後半2時間を交流タイムとした。寺子屋ありすは高校生・大学生が主体となっているが、寺子屋サンサンは高校生が主体となって活動を実践した。

表4 平成28年度寺子屋の内容

	青森市	黒石市
名称	寺子屋ありす	寺子屋サンサン
開催場所	青森県総合社会教育センター	黒石市立東公民館
開催時期・時間	毎週日曜日 及び長期休業中 13:00～17:00	月2回日曜日 及び長期休業中 13:00～17:00

(2) 平成29年度

モデル地域として、市部だけでなく新たに町部での開催を模索し七戸町でも開催することとした。

講座を全7講座を実施し、演習（寺子屋）を七戸南公民館で月1回日曜日に開催した。時間配分は、他の寺子屋と同様に前半2時間前半2時間を勉強タイム、後半2時間を交流

タイムとしている。

表5 平成29年度の寺子屋の内容

	青森市	黒石市	七戸町
名称	寺子屋ありす	寺子屋サンサン	寺子屋サンバとらじょ
開催場所	青森県総合社会教育センター	黒石市立東公民館	七戸町立七戸南公民館
開催時期・時間	毎週日曜日 及び長期休業中 13:00～17:00	月1回日曜日 及び長期休業中 13:00～17:00	月1回日曜日 及び長期休業中 13:00～17:00

(3) 平成28年度～平成29年度の成果

全7回実施した講座では、平成28年度、平成29年度ともに90%以上の満足度を得ることができた。また、参加者は小学生・中学生・高校生・大学生と幅広い世代から集まっているため新しく交友関係を広げることができ、同年代だけではなく年上、年下の人とのコミュニケーションの取り方を学ぶことができた。

演習（寺子屋）では、講座内容を実践することができ、参加者の手応えや意欲の向上につながることができた。また、開催場所を普段から地域住民のための様々な事業を行ったり気軽に集まったりする場である公民館にしたことで、地域住民である小学生から高校生までの継続的な参加につながった。

さらに、実施自治体の理解を得ることができ、青森市は後援、黒石市・七戸町では共催として事業を実施することができた。

(4) 平成28年度～平成29年度の課題

講座回数が7回と多いため、全講座に参加できた者は少なかった。また、演習「寺子屋」を月1回日曜日の開催としたが、日曜日に都合が悪い場合は参加ができず、後半は参加者が固定化された。さらに、開催場所が公民館の場合、自宅から公民館まで遠い児童は参加が難しく、特に小学生の参加が少なかった。これにより、参加する中学生・高校生・大学生の参加意欲が減退する恐れがあるため、改善していく必要があった。

Ⅲ 現行事業「青森で生きる未来 人財育成事業」の概要

平成30年度～

平成28年度から29年度の成果と課題を踏まえて、平成30年度は、講座と演習（寺子屋）という2本立ての仕組みは維持しながら内容をリニューアルすることとした。また、講座のリニューアルに合わせ講座名を変更し、人財育成事業である点を強調することとした。

1 実施形態

モデル事業を実施して県内全域への普及を目的とするため、2年間は県主催で実施し、その後は実施自治体に引き継ぐこととした。また、実施自治体のニーズに対応し協力して行うため、引き続き当センターが共催として関わることとした。

2 実施地域

県内全ての地域に普及を目指すため、実施地域や人口規模を考慮し前年度に開催した1市1町（青森市、七戸町）に1市（八戸市）を加えて3市町で開催することとした。

3 対象

小学生から大学生までを対象とし、小学生と中学生・高校生・大学生でそれぞれ活動の目的（目標やねらい）を明確にすることとした。小学生は、学校や家庭では体験できない年長者との関わりを持ち社会性を向上させることを目指し、中学生・高校生・大学生は、目的意識やリーダー性を高め、主体性や自己肯定感を向上させることを目指し寺子屋運営に当たることとした。

4 内容

講座は全講座への参加者が少ないことから回数を見直し、平成30年度は5講座とした。演習（寺子屋）は、地域住民のための様々な事業を行ったり気軽に集まったりする場である公民館を会場に、中学生・高校生・大学生が小学生と一緒に勉強したりレクリエーションを行ったりする機会を作ることとした。

さらに、公民館での寺子屋の他に児童館での交流（月1回実施）を行うこととした。放

課後の児童の活動場所になっている児童館での活動を通して、中学生・高校生・大学生が多く的小学生と交流し、コミュニケーションの方法を学んだり企画を実施したりすることを取り入れた。これは、児童館での学びを公民館で実施する寺子屋に反映させることで、演習（寺子屋）全体の充実を図ることも目指している。

Ⅳ 現行事業の取組

1 平成30年度の取組の実践

(1) 講座

前述のとおり、7講座を5講座に減少させ、参加者が1つでも多くの講座に参加できるよう配慮した。講座数は減少したが、寺子屋を実施するための講義・演習を導入から実践まで系統的な流れとなるように配慮した計画としている。また、講座目的や内容に合わせて県外講師を招聘することができたことは、講座目的を達成させるだけではなく、参加者にとっても魅力的で貴重な経験を積む機会を作ることができると考えた。なお、3地区での開催であり、前半は各地区での開催を基本としたが、「夏休み特別講座」以降は、交流や情報交換もねらい合同での開催としている。講座開催に当たり、青森市は学生団体レスタに参加協力を依頼した。

表6 講座全体の構成

講座名	期日	会場	内容・講師等
第1講座	5/27(日)	当センター	講義「児童への接し方について」 演習「ネイチャーゲーム」 講師 県総合社会教育センター職員
	6/17(日)	八戸市立 吹上公民館	講義「寺子屋の目的」 「ボランティアの意義」 演習「私たちが目指す寺子屋を考える」
	6/10(日)	七戸町立 七戸南公民館	「寺子屋運営に必要なこと①」 講師 県総合社会教育センター職員
第2講座	12/2(日)	当センター	演習「子どもに隠れた困り感」 講師 レスタ大学生
	7/8(日)	八戸市立 吹上公民館	講義「寺子屋の目的」 「ボランティアの意義」 演習「私たちが目指す寺子屋を考える」
	7/1(日)	七戸町立 七戸南公民館	「寺子屋運営に必要なこと①」 講師 県総合社会教育センター職員
夏休み 特別講座	8/5(日)	当センター	テーマ 自分らしく生きる指針を見つけよう！ 講師 合同会社ファミリーコンパス協同代表 渋谷 聡子 氏
第3講座	9/1(土)	当センター・ 青森公立大学 国際交流ハウ ス	テーマ 高校生レストランの仕掛け人と語り合う 1泊2日～君たちの可能性は無限大～ 講師 未来の大人応援プロジェクト代表理事 皇學館大学教授 岸川 政之 氏
	9/2(日)		
第4講座	9/30(日)	当センター	【実践活動】 (1) カレーライス販売体験 (2) フェア出展団体によるお仕事体験 (3) 出展ブース見学

小学生・中学生・高校生・大学生のみなさん

「青森で生きる未来人財育成事業」

に参加しませんか？

青森で生きる未来人財育成事業とは

※人は青森県にとっての「財(たから)」であることを基本的な考え方としており「人材」を「人財」と表記しています。

小学生から大学生までを対象に、異年齢集団での活動の中から多様な気づきを得てお互いに成長していく講座と演習による事業となっています。

講座 (中学生・高校生・大学生対象)

年間6回の講座で、コミュニケーション力の向上やネットワークを広げます。



これからの講座のご案内

(会場 総合社会教育センター)
8月5日(日)10:00~15:00
講師 渋谷聡子氏(ファミリーコンパス共同代表)
9月1日(土)~2日(日)1泊2日
講師 岸川政之氏(皇學館大学教授) 他2回

演習(寺子屋) (小学生・中学生・高校生・大学生対象)

講座で学んだ中学生・高校生・大学生が、学んだことを生かし実践する場として、小学生を対象に総合社会教育センターや公民館・児童館を使って活動します。

勉強タイム(前半)
小学生が持ってきた宿題を一緒に解いたり、一人勉強をサポートしたりします。



レクリエーションタイム(後半)
中学生・高校生・大学生が考えたボール遊びや絵本、クッキングなどのレクリエーションを小学生と一緒に楽しめます。



演習会場

	青森市	八戸市	七戸町
開催場所	青森県総合社会教育センター	八戸市立吹上公民館 八戸市吹上児童館	七戸町立七戸南公民館 七戸町立城南児童館
開催曜日 時間	毎週日曜 13:00~17:00	公民館~月1回日曜 13:00~16:00 児童館~月1回土曜 14:00~16:00	公民館~月1回日曜 13:00~16:00 児童館~月1回土曜 (7月・8月) 14:00~16:00 (9月~3月)
開催時期	4月から開催中	7月から開催中	7月から開催中

随時参加申し込み受付中!

自己肯定感を高め、主体的に行動する青少年の育成

伸びる能力	身につく姿勢	ネットワーク
Point 1 失敗・成功を体験し自分自身に自信を付けていきます。	Point 2 多様な年齢の人と協力して企画実行する力が身に付きます。	Point 3 社会参加活動やボランティア活動に熱心な仲間が広がります。

青森県総合社会教育センター教育活動支援課 TEL.017-739-1270 FAX.017-739-1279
E-mail: E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp http://www.alis.pref.aomori.lg.jp/

図2 教育広報あおもりけん掲載記事

① 第1講座

講座名	期日	会場	内容・講師等
第1講座	5/27(日)	当センター	講義「児童への接し方について」 演習「ネイチャーゲーム」 講師 県総合社会教育センター職員
	6/17(日)	八戸市立吹上公民館	講義「寺子屋の目的」 「ボランティアの意義」 演習「私たちが目指す寺子屋を考える」
	6/10(日)	七戸町立七戸南公民館	「寺子屋運営に必要なこと①」 講師 県総合社会教育センター職員

第1講座は開催している3地区それぞれで開催した。青森会場は、学生団体「Lesta」に所属し、継続して寺子屋に参加している学生が多いことから、より発展的な講義・演習内容とした。演習では、小学生・中学生と一緒にレクリエーションをする題材となるネイチャーゲームについて、ネイ

チャーゲームリーダーの資格を持つ社会教育主事が講師になり進化した。七戸会場では、町内中学校1校、町内、近隣高校2校にチラシを配付し参加者を募集したところ、中学生1名、高校生は2校から9名が参加し、八戸会場では、会場校区中学校1校、高校5校にチラシを配付し参加者を募集したところ、中学生1名、高校5校から21名が参加した。七戸会場、八戸会場は、学生団体による協力はなく、当センターで参加者を募集して集まったので新規の参加者も多く、講座の内容も青森会場とは変え寺子屋の目的、小学生との接し方など基礎・基本的な内容となっている。講座前半は、動画で昨年度までの様子を見てイメージを持ち、後半は寺子屋を運営するために必要となる寺子屋の意義やボランティアに関する講義、小学生と接するためのコミュニケーションに関する基礎的な内容を演習形式で行った。

【第1講座 青森会場の様子】



【第1講座 七戸会場の様子】



【第1講座 八戸会場の様子】



【受講生の感想】

七戸会場

- ・他の地域の活動を見て、とても楽しそうにやっていて、早く寺子屋をやりたいと思いました。とても充実した時間を過ごすことができました。寺子屋についても知り、仲間との距離も少し縮まりました。講義も分かりやすく楽しく「たしかになあ」と思って聞けました。
- ・小学生とどのようなことをすれば良いかわかった。どのようなことをしていくのか、写真付きで分かりやすかった。

八戸会場

- ・同じメンバーで色々と企画してやれるというのは、なかなかないと思います。やれることなら出た案全てやれるくらいの勢いで頑張りたいと思います。小学生と楽しく関わって有意義な時間にできたらなあと思っております。
- ・今日の活動に参加できてとても良かったです。小学生とのコミュニケーションの取り方などが教育分野に興味があるので、とても参考になりました。
- ・どのような活動をするのかの紹介を聞いて、これからの活動がとても楽しみになりました。これからできる限り参加させていただきたいと思います。

② 第2講座

第2講座	12/2(日)	当センター	演習「子どもに隠れた困り感」 講師 レスタ大学生
	7/8(日)	八戸市立吹上公民館	講義「寺子屋の目的」 「ボランティアの意義」 演習「私たちが目指す寺子屋を考える」
	7/1(日)	七戸町立七戸南公民館	「寺子屋運営に必要なこと①」 講師 県総合社会教育センター職員

第1講座同様に3地区それぞれの開催とした。青森会場では、「Lesta」大学生が講師となり、自分たちが寺子屋を運営する中で課題と思っていることの中から、自分たちでテーマを決めて取り組んだ。

七戸会場・八戸会場では、仲間作りのためのアイスブレイクや実際に寺子屋で小学生と接するために必要なコミュニケーションに関する講義を受講後、第1回目の寺子屋を想定したシミュレーションを行い、役割分担や必要な物、配慮事項などの確認を行った。

【第2講座 七戸会場の様子】



【第2講座 八戸会場の様子】



③ 夏休み特別講座

夏休み特別講座	8/5(日)	当センター	テーマ 自分らしく生きる指針を見つけよう！ 講師 合同会社ファミリーコンパス協同代表 渋谷 聡子 氏
---------	--------	-------	--

青森市出身で、現在ファミリーコンパス共同代表を務める渋谷聡子氏を講師に、「自分らしく生きる指針を見

けよう」をテーマにワークショップを実施した。自己肯定感が低いと言われる高校生に、自分たちが行っていることに自信を持って欲しいと思っていたタイミングで実施することができた。また、3地区合同での開催とし、当センターの会場へ七戸地区、八戸地区の高校生も参加し、講座を受講するだけでなく、寺子屋ありす会場の見学や同じ思いで寺子屋を運営する他地区の高校生との情報交換など、親睦も深めることもねらいとした。

目的 ワークショップを通して、「自分らしく生きる力」や「他者を理解し共感する力」を育み、自己肯定感を高めるとともに主体的に行動できるようにする。

講師 ファミリーコンパス共同代表 渋谷 聡子 氏

内容 体験型のワークと対話を取り入れながら、「自分らしく生きる力」や「他者を理解し共感する力」を育むワークショップ

感想 ・今日得たことを生かして「自分の心」を大切に生きていきたい。自分の存在価値を肯定して自信を持って生きていきたい。大学、絶対合格します。
・学校などでは学ぶ事ができないことを学べた。
・様々な人がいるけれど、それぞれのありのままを受け止めて、自分も大切にしていきたい。

平成30年度 青森で生きる未来人材育成事業 中学生・高校生・大学生対象

未来の自分を見つける講座

「自分らしく生きる力を身に付けたい」
「自分に自信を付けたい」「主体性を身に付けたい」
そんな若者を応援するための講座です。

参加者募集!

“自分らしさ”って何だろう？
周囲の人たちの評価が気になる自分。
自分の想いを大切にしたい自分。
何でもできそうな自信を感じる自分。
自分には何もできないような不安になる自分。
自分ひとりのなかにも、いろんな自分がある。
その自分が「大切にしたいこと」を見つけることが、
自分を知ることであり自分らしく生きることにつながる。
自分らしく生きるための指針(コンパス)は、あなたの中にある。
あなただけのコンパスを一緒に見つけに行こう!

夏休み特別講座

テーマ 自分らしく生きる指針を見つけよう！

日時 8月5日(日) 10:00~15:00

場所 青森県総合社会教育センター

参加費 無料

内容 体験型のワークと対話を取り入れながら、「自分らしく生きる力」や「他者を理解し共感する力」を育みます。

講師 ファミリーコンパス共同代表 渋谷 聡子 氏
株式会社ベネッセコーポレーションにて、生涯ゼミ中学講座の企画指導員(赤ペン先生)育成マネージャーを経て、オンライン新規事業の立ち上げに従事。独立後、エグゼクティブコーチとして「個人と組織の可能性を最大限引き出す」をテーマに、経営者、政治家、アスリートなどに対する組織変革コンサルティングを行う。青森市出身。現在は一男一女の母。

特別公開講座

テーマ ~高校生レストランの仕掛け人と語り合う1泊2日~
君たちの可能性は無限大

日時 9月1日(土) 13:00~
2日(日) 12:00

場所 集合・活動 青森県総合社会教育センター
宿泊 青森公立大学国際交流ハウス
(社会教育センターから貸し切りバスで移動します)

参加費 1,500円(食費等)

内容 対話や課題解決型のワークショップを通して考え方や生き方のヒントを得て、自信や主体性を育みます。

講師 未来の大人応援プロジェクト代表理事 岸川 政之 氏
1957年生まれ。1982年三重県多気町入居。高校生レストラン「まごの店」など、コミュニティビジネスの手法を取り入れた地球おこしに取り組み、2011年5月からは「高校生レストラン」と題してテレビドラマ化され話題を呼んだ。また、2013年4月、高校生らの若者がビジネス手法を取り入れながら地域課題を解決していく、「SBP(ソーシャル・ビジネス・プロジェクト)」を立ち上げ青森県からも4高校が参加しており、今後の展開に期待が果実まっている。

【夏休み特別講座の様子】



図3 夏休み特別講座・第3講座募集チラシ

④ 第3講座

第3講座	9/1(土) ～ 9/2(日)	当センター・ 青森公立大学 国際交流ハウ ス	テーマ 高校生レストランの仕掛け人と語り合う 1泊2日～君たちの可能性は無限大～ 講師 未来の大人応援プロジェクト代表理事 皇學館大学教授 岸川 政之 氏
------	-----------------------	---------------------------------	---

高校生レストランの仕掛け人で、未来の大人応援プロジェクト代表理事岸川政之氏を講師に、高校生に自分自身の伸びしろに気付きもっと主体的になって

欲しいと考え、そのきっかけとして開催した。また、ワークショップだけでは得られないたくさんの体験をしてほしいと考え1泊2日の交流として、講義室や談話室なども備え付けられている宿舎を会場とした。

目的 全国で主体的に活躍する高校生の話を聞いたり、ワークショップを受講したりすることで、青森県の中学生・高校生・大学生が自己肯定感を高め自分の可能性に気付き、これから主体的に行動しようとするきっかけとする。

講師 岸川 政之 氏
一般社団法人 未来の大人応援プロジェクト 代表理事
皇學館大学現代日本社会学部教授百五銀行地域創生部顧問&まちの宝創造アドバイザー

内容 1日目 1分PR動画制作ワークショップ（動画制作・視聴・講評）
2日目 「出会い・感動・夢…生きるって素晴らしい」

感想

- ・人生には失敗はないということで、自分の夢をさらに叶えるためにアクションを起こしたいと思えた。
- ・「無限の可能性。未来は今から変えられる」という言葉が印象的でした。初めての人たちと交流し、とても良い経験ができました。
- ・受験に失敗してすごく悩んでいたけれど岸川先生の話聞いて、どんどん前に進んでいこうという気持ちになれた。
- ・初対面の人と動画を作ったり、泊まって遠くの人たちと交流することができたりと、とても楽しかったです。講座では、夢や気付き、主体的な生き方などためになる話をたくさん聞くことができて良かったです。

【第3講座の様子】



⑤ 第4講座


第4講座	9/30(日)	当センター	【実践活動】 (1) カレーライス販売体験 (2) フェア出展団体によるお仕事体験 (3) 出展ブース見学
------	---------	-------	--

当センター生涯学習フェアを活用し、普段の寺子屋では実施できない体験と共に、様々な出店ブースを見学することにより視野を広げて欲しいというねらいで開催した。

「Lesta」がカレーショップを出店することから、高校生・大学生が寺子屋に参加している小学生と一緒に販売体験をしたり、他ブースの見学・体験を行ったりする実践活動を行った。

9/30(日)は生涯学習フェア **寺子屋特別企画**
生涯学習フェアを楽しむ1日

主催 青森県総合社会教育センター
後援 青森市教育委員会



- 対象** 小学校1年生～小学校6年生
- 体験内容** ◇高校生・大学生と「カレー」販売体験
(お客さんにカレーを渡したり声を掛けたりします)
◇フェア出展団体による「わ～く・WORK・ランド」「お仕事」コーナー等の体験
◇フェア出展ブース見学・体験
- 日程** ※現地集合・解散となりますので、保護者による送迎をお願いします。

9月30日(日)	9:50	集合 青森県総合社会教育センター 1階インフォメーションプラザありす奥、寺子屋スペース
	10:00	オープニングイベント見学、出展ブース見学・体験参加
	11:00	カレー販売体験活動
	12:00	昼食(昼食は持参または各自負担)
	12:30	フェア出展団体によるお仕事体験参加、出展ブース見学
	14:00	終了・解散 青森県総合社会教育センター 1階インフォメーションプラザありす奥、寺子屋スペース

- 参加費用** 無料 (昼食にカレーを食べる場合や有料ブースを体験したい場合はお小遣いを持たせて下さい) カレーは300円～400円を予定
- 持ち物** 筆記用具、昼食(カレーライス購入も可能)、水筒(給水用)、エプロン、三角きん(またはバンダナ)

【第4講座の様子】



図4 第4講座参加者募集チラシ

(2) 演習(寺子屋)

演習実施に当たっては、各会場共に小学生の参加が必要となる。そこで、実施自治体教育委員会の共催・後援を得ることで協力を受けながら、当センターで会場周辺を中心に小学校を通して小学生にチラシを配付し参加者

を募集した。参加する方法は、青森会場では登録無しで都合に合わせてきてもらう方法を取り、七戸、八戸会場では事前に登録してもらった後に、その都度の申し込みはなく自分の都合に合わせて参加してもらうこととした。

① 青森会場

青森会場（寺子屋ありす）では、前年度までと同様に毎週日曜日、13:00～17:00の開催とした。前半2時間の勉強タイムでは、小中学生が持参した宿題に取り組むほか、コピー可能な問題集を用意し、早く終わった場合にも対応できるようにした。高校生・大学生の基本姿勢は教えるのではなく“寄り添い”“見守る”という態度である。後半2時間は、交流タイムで高校生・大学生がレクリエーションを企画し実践する。季節や天候、参加人数に合わせて、畑活動や外での鬼ごっこをした他、館内に様々な用途の研修室がある利点を生かし、調理や軽スポーツなど工夫して実施した。

【寺子屋青森会場の様子】



② 七戸会場

七戸会場では、公民館での実施の他に児童館でも実施した。公民館は近隣小学校からの参加や高校生の通いやすさも考えて、町役場近くの七戸南公民館を会場とした。開催時間は13:00～16:00とし、内容は青森会場同様前半を勉強タイム、後半を交流タイムとしてレクリエーションを実施した。館内に広い講堂や和室がある他、図書館を併設していることから、交流タイムでは講堂での卓球・ドッジボールや図書館での読書など会場の利点を生かした活動を実施することができた。

児童館は、同様に高校生の通いやすさを考えて七戸高校隣の城南児童館を会場とした。活動時間は、児童館の時間割に合わせて14:00～16:00の2時間とし、内容は前半1時間を高校生主体によるレクリエーション、後半1時間ほどを小学生と高校生が自由に遊ぶ時間とした。高校生主導によるレクリエーション時間を作ることで、計画性や主体性を養うと共に、自由に遊ぶ時間も設けることでリラックスした状態で小学生とのふれあいを楽しむことをねらった。

【寺子屋七戸会場の様子】

（七戸南公民館）



（城南児童館）



③ 八戸会場

七戸会場と同様に公民館と児童館で実施した。中心街から徒歩圏内であり多くの高校生の参加を期待して、前年度から引き続いて吹上公民館と同じ学区にある吹上児童館を会場とした。公民館での開催時間・内容は七戸同様13:00～16:00、前半勉強タイム、後半交流タイムとした。館内は広いホールを使用することができたので、交流タイムではドッジボールや鬼ごっこなどのダイナミックな遊びも実施することができた。

児童館も七戸同様14:00～16:00までの2時間とした。一輪車活動が盛んな児童館で、小学生が一輪車を披露してくれることがあった。

【寺子屋八戸会場の様子】

(吹上児童館)



(吹上公民館)



(3) 平成30年度の成果と課題

ア 成果について

(ア) 講座について (アンケート結果から)

表7 講座受講者アンケート結果 (4段階評価)

	受講者数	満足度	やる気の向上
第1講座	45	3.8	3.8
第2講座	29	4.0	3.7
夏休み特別講座	12	4.0	3.9
第3講座	17	3.6	3.6
第4講座	16	未実施	未実施
	119	3.9	3.8

講座全体の満足度は4段階評価で3.9、やる気の向上は3.8と非常に高い評価であった。また、自由記述をキーワードで着目していくと、「やる気」「積極的」「がんばりたい」という言葉が多く出てきており、講座の趣旨である「青少年の自己肯定感や主体性を高めること」が達成できたと考える。特に外部講師を招いての講座では受講者の満足度が非常に高く、その後の意欲の喚起を図ることができた。一方で、回数を減らしたことで継続した参加が増えたものの、講座全体の参加者増加までは届かず、講座に関しては抜本的な改革が必要とされた。

(イ) 演習 (寺子屋) について (アンケート結果から)

表8 寺子屋参加者アンケート結果 (4段階評価)

	のべ受講者数	満足度	やる気の向上
七戸会場	63	4.0	3.9
八戸会場	73	3.9	3.9
		4.0	3.9

七戸会場 公民館7回 児童館9回実施
八戸会場 公民館8回 児童館5回実施

七戸会場、八戸会場ともに中・高校生の満足度、やる気の向上共に高く、講座で学んだことを実践する機会を公民館・児童館と会場を増やしたことで参加者の満足度が非常に高くなった。

一方で課題については、第1講座を受講しなければその後の講座にも参加できないこととしていたが、第1講座を1回しか設定していなかったこともあり、参加者の枠を狭める結果となった。また、八戸市内の公民館では土・日に職員が不在であり、公民館職員と協力できないことも課題であった。他には、公民館に小学生から高校生まで集めること当センターの負担が大きいという課題と、青森会場では、毎週日曜日開催としていたが、参加

する高校生・大学生が減少してきたことと、準備時間が無く特にレクリエーションの内容がマンネリ化してきたことということがあった。

2 令和元年度

モデル事業最終年度とし、青森会場、八戸会場2地区での実施とした。

講座全体の構成としては演習寺子屋を主体として、講座の内容は寺子屋に必要なコミュニケーションに絞ることとした。また、昨年度までの第1講座、第2講座の内容を合わせ

て「コミュニケーション講座」として1回で実施することとした。

演習では、八戸会場では課題であった公民館会場をやめ、児童館と共に新たに放課後子ども教室を会場とした他に、公民館や公共施設でのボランティア活動も取り入れることとした。青森会場では、開催日を月2～3回日曜日に減らし、寺子屋がない日曜日に準備やスキルアップのための研修をいれることで、活性化や内容の充実を図ることとした。(図5)

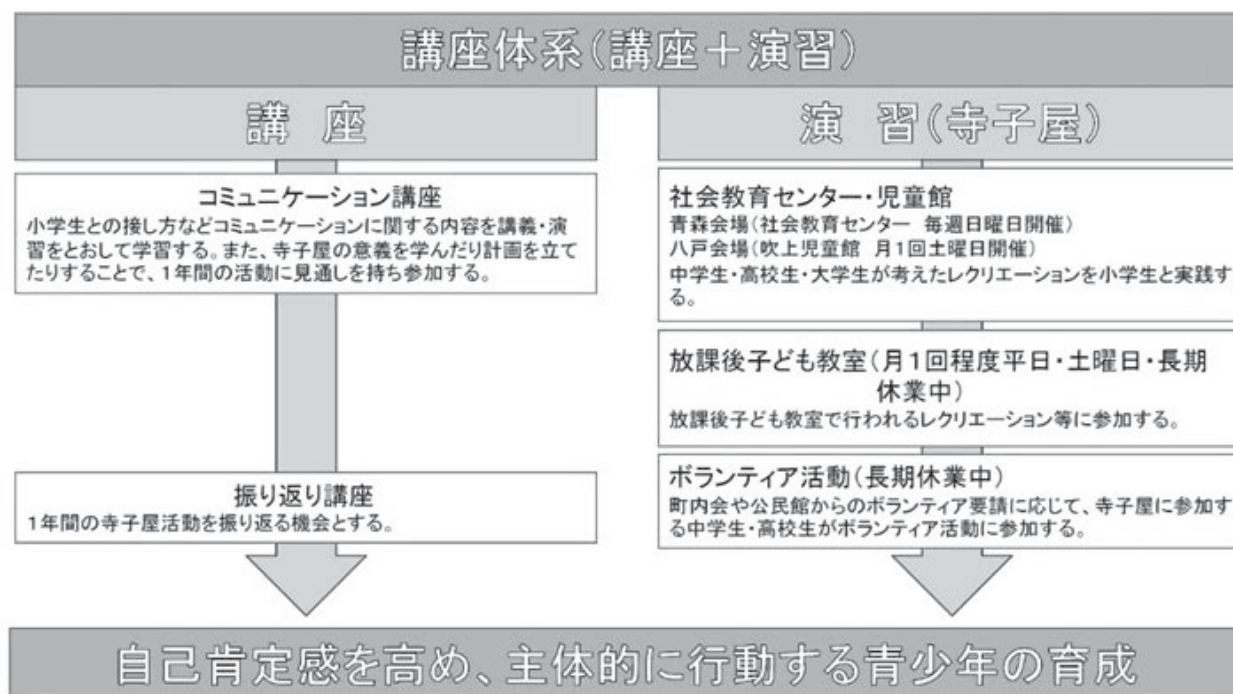


図5 令和元年度の講座体系図

小学生・中学生・高校生・大学生の「寺子屋」に参加しませんか？

寺子屋とは・・・小学生から大学生まで、みんなで一緒に勉強やレクリエーションを行う中で、お互いに学び合い、豊かな心を育み、ともに成長していく活動です。

どんなことをするの？

中学生・高校生・大学生が自分たちでレクリエーションなどを考えて小学生と一緒に楽しく遊んだり、一緒に勉強したりします。学校や家庭とは違う、異年齢集団での活動と「ナナメの関係」を通じて様々なことを学び体験することができます。

勉強タイム

小学生が持ってきた宿題を一緒に解いたり、サポートしたりします。



レクリエーションタイム

中学生・高校生・大学生が考えた遊びや絵本読み聞かせ、クッキングなどのレクリエーションを小学生と一緒に楽しみます。また、小学生向けイベントのボランティア活動にも参加します。



どんな力がつくの？

伸びる能力

Point 1
コミュニケーション力
アップ

身につく姿勢

Point 2
積極性と自己肯定感
アップ

ネットワーク

Point 3
仲間の輪が広がる

進路選択に役立つ力と自信がつかます

これから参加したい
中学生・高校生・大学生は？

体験会・説明会に参加してください。

青森会場 見学・体験会

【日時】7月14日(日) 14:00~16:00
7月28日(日) 14:00~16:00
【場所】総合社会教育センター
【申込】不要 当日直接来てください。



八戸会場 説明会・コミュニケーション講座

【日時】7月26日(金) ①10:00~12:00
②14:00~16:00
7月27日(土) ③10:00~12:00
①~③は同じ内容です。都合の良い日程に参加してください。
【場所】八戸ポータルミュージアムはっち5階
【申込】不要 当日直接来てください。



これからの青森県を担う
若者の成長を応援します！

いつ、どこで活動しているの？

会場	青森市	八戸市			
	小学生~大学生	中学生~大学生			
募集対象	小学生~大学生	中学生~大学生			
開催場所	青森県総合社会教育センター	八戸市 吹上児童館	根城小学校 放課後子ども教室	八戸ポータルミュージアムはっち	八戸市立 吹上公民館
開催曜日	月2~3回程度 日曜 13:00~17:00	月1回程度 土曜 14:00~16:00	年4回 土曜 14:00~16:00	まるごとこどもはっち 夏祭りなど小学生向け イベントにボランティアとして参加	8月・12月 寺子屋開催 10月・6日 公民館まつりボランティア
開催時期	4月から開催中	6月から開催中	8月から開催	7月から開催	8・10・12月開催
小学生の参加	申し込み不要、直接会場に来てください。	吹上児童館に登録している小学生が対象となります。	根城小学校放課後子ども教室に登録している小学生が対象となります。	主催者(こどもはっち)にお申し込みください。	別途、参加申し込みを受け付けます。

自分の都合に合わせて1回から参加することができます。
詳しい日程は、総合社会教育センターホームページをご覧ください。

青森県総合社会教育センター教育活動支援課 TEL.017-739-1270 FAX.017-739-1279 Mail:E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp
http://www.alis.pref.aomori.lg.jp/

図6 教育広報あおもりけん掲載記事

表9 コミュニケーション講座実日

青森会場

月	日	曜日	会場	時刻
6月	23	日	コミュニケーション講座	当センター 15:00~17:00

八戸会場

月	日	曜日	会場	時刻
6月	8	土	寺子屋説明会・コミュニケーション講座A	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスA 10:00~12:00
			寺子屋説明会・コミュニケーション講座B	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスB 14:00~16:00
	9	日	寺子屋説明会・コミュニケーション講座C	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスA 10:00~12:00
			寺子屋説明会・コミュニケーション講座D	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスA 14:00~16:00
	16	日	寺子屋説明会・コミュニケーション講座E	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスC 10:00~12:00
			寺子屋説明会・コミュニケーション講座F	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスC 14:00~16:00
7月	26	土	寺子屋説明会・コミュニケーション講座G	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスC 10:00~12:00
			寺子屋説明会・コミュニケーション講座H	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスC 14:00~16:00
	27	日	寺子屋説明会・コミュニケーション講座I	八戸ポータルミュージアムはっち5階 レジデンスC 10:00~12:00

(1) コミュニケーション講座

昨年度まで実施していた第1講座、第2講座の役割を果たし、説明会と共に寺子屋を実施する上で必要となる小学生とのコミュニケーションに絞って実施した。内容としては、①コミュニケーションの基本、②心のシャッターを開けるスキル、③聴き上手になるスキル、④気持ちを伝えるスキル、⑤上手なキャッチボールをするために、⑥子どもとのかかわりの6つとし、講義だけではなく演習も随所に取り入れながら楽しく学ぶことができた。また、八戸会場は中学生、高校生が市内全域から集まりやすい場所として、八戸ポータルミュージアムはっちで実施した他、複数日の午前・午後に設定することで、参加者の増加を図った。

【受講生の感想】

- ・実際に体験することで自分の言葉で伝えることの難しさ、会話のうで目を合わせることや傾きながら聴くことの大切さに気がつくことができた。
- ・相手に伝わっていると思っていても伝わっていない場合もあるので、「分からない」を念頭に話す大切さを学んだ。
- ・寺子屋の時だけではなく、普段の生活や学校生活でもコミュニケーションのコツを使って相手に伝えられるようにしたい。
- ・将来、子どもに関わる仕事に就きたいので寺子屋にどんどん参加したい。
- ・コミュニケーション研修で得たことを、寺子屋や将来の自分の夢に生かしていきたい。
- ・寺子屋の活動を通じて、積極性を身に付けていきたい。

【コミュニケーション講座の様子】



(2) 演習（寺子屋）

①青森会場（寺子屋ありす）

前年度の課題により実施回数を減らし月2～3回日曜日としたことで準備の時間が生まれ、特に演習後半の交流タイムでは、製作物を使ったゲームなど今までは少なかった活動が取り入れられるようになった。また、話し合いに時間をかけることができるようになり、前回の反省を踏まえた活動や、活動に対する共通理解が図られるようになり、活動全般が円滑に進むようになってきた。

②八戸会場

児童館は昨年度から引き続き吹上児童館で開催した。また、課題となった公民館ではなく新たに開催した放課後子ども教室は、根城小学校の校内に設置されている放課後子ども教室に参加することとした。根城小学校がバス運行経路に近いことと、中学生・高校生の参加しやすい日時に開催できることから、中学生・高校生の一層の参加を期待しての開催となった。実際2回実施した段階でそれぞれ10名近くの高校生が参加し、活発な活動を展開することができた。

また、地域活動に関心を持たせることをねらって、公共施設でのボランティア活動も取り入れた。こどもはっちの協力により、希望者をこどもはっち主催の幼児や小学生向けイベントの際ボランティアとして受入れて頂いた。

さらに、夏季・冬季休業中には、準備から運営まで全てを自分たちで企画する「寺子屋夏休み教室」「『サンタワールド』de 楽しもう」を実施した。夏季は吹上公民館、冬季は八戸ポータルミュージアムはっちを会場に夏季12名、冬季26名とたくさんの小学生が参加する中、実施することができた。

令和元年度「青森で生きる未来人財育成事業」

「サンタワールド」de 楽しもう

参加小学生募集

サンタに扮した中学生・高校生のお兄さん・お姉さんと一緒に遊びませんか？
楽しいお兄さん・お姉さんが考えたレクリエーションで一緒に遊んだり、お菓子を作ってくださいます。
普段はなかなか一緒に遊べないお兄さん・お姉さんとたくさん遊びましょう！

参加費 無料

開催日時 **12月22日(日) 13:00～16:00** (12:30受付開始)

場所 **八戸ポータルミュージアムはっち5階共同スタジオ**

対象 **小学校1～6年生**

持ち物 **宿題** (30分ほどの勉強の時間でもできるもの、本や塗り絵でも可)

定員 **30名** ※応募多数の場合は先着順とさせていただきます。締切 **12月18日**

申し込み **Eメール・はがき・FAXのいずれかでお申し込みください。** (画用紙を御覧ください)

夏休みに実施した様子

夏は吹上公民館で実施

お楽しみメニュー

楽しい体験がたっくさんできるよ！

- 1 サンタさんと「お遊戯」
- 2 サンタさんの「おまじない」
- 3 サンタさんと「血内探検」
- 4 ストロボフラット・ペイント・字印ボール・リング etc
- 5 サンタさんと「ニューズボール」
- 6 サンタさんと「かんたんクイズ」

保護者の方へ

- この事業は、コミュニケーションなどの研修を受けた中学生・高校生が、学んだ事を実施する者として自分たちで企画を考へて実施します。
- 当日は、中学生・高校生のコンプライアンスの指導員が参加します。
- 参加小学生には、レクリエーションの参加費が無料です。
- 当日、受付時に緊急連絡先や記載して欲しいことなどを、得意確認させていただきます。
- 万が一、保護者の付加費が必要ありませんが、安全確保のため会場までの送迎は保護者の方にお任せいたします。

青森県総合社会教育センター教育活動支援課

お問合せ 申し込み 住所：青森市荒川字藤戸119-7
TEL：017-739-1270 FAX：017-739-1279
Email：E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp

主催／青森県総合社会教育センター 共催／八戸市教育委員会

【「『サンタワールド』de 楽しもう」開催日当日の様子】



図7 「サンタワールド」de 楽しもう参加小学生募集チラシ

3 平成30年度～令和元年度についての考察

(1) 参加者数の推移

表10 八戸会場登録者

平成30年度	高校生22名	中学生1名
令和元年度	高校生71名	中学生2名

前述のとおり、令和元年度は八戸会場で中学生・高校生の都合を考え研修日を複数日、午前・午後と計9回の機会を設けた。また、児童館、放課後子ども教室、ボランティア活動と多様な活動機会を設けた。これにより、興味がある生徒が参加しやすくなり、登録者数が増加した。このことは、部活動や模擬試験などによって多忙な高校生にとって、参加しやすい環境を整えることで興味のある生徒が参加しやすくなったのではないかと考えられる。

(2) 受入れ施設のニーズについて

受入れ施設側はどのように受け止めているのか。平成30年度と令和元年度に受け入れて頂いた3施設にアンケートを記入して頂いた。

【対象】

寺子屋受入れ施設（3カ所）
回収 3（回収率100%）

【方法】

質問紙をFAXで送信

【内容】

- ①寺子屋の満足度について
- ②活動中の施設の子どもの様子について
- ③今後も寺子屋受入れ希望について
- ④寺子屋に関する意見や要望について

活動の満足度は、3施設全てで4段階中4.0で高い結果を得られた。自由記述欄には、「子どもたちは高校生の来館を喜んでいますが」、「プログラムが良い」、「初対面である子どもたちとの接し方が良い」、「高校生が上手にリードしてくれたので子どもたちが積極的に参加していました。」と、高校生の頑張りが高く評価される内容となっている。

活動中の子どもたちの様子については、「高校生の名前を覚えて関心を示している」「お兄さん、お姉さんを間近に感じて喜んでいる」

「慣れてくると積極的に関わっている」など高校生の参加について好意的な様子が書かれていた。

今後も「受入れを希望しますか」という問いには全施設が「希望したい」という回答であった。理由として、「子どもたちの楽しみになっている」「職員も新しい遊びを学ぶことができ参考になっている」「支援員とは違う接し方を子どもたちが体験することができる」「子どもたちはもちろん、支援員もとても勉強になっている」と、高校生の参加は小学生だけではなく、施設職員にとってもプラスになっているということが言える。

「寺子屋」受入れについての要望では、男子高校生の参加を望む声が多数からあがった。また、「高校生の参加には、保護者の送迎協力があることで保護者に感謝している」という意見もあり、高校生の参加には交通手段の確保が欠かせないことも改めて示された。

以上のアンケート結果から、参加した中学生・高校生だけではなく、受入れ施設にとってもメリットのある活動となっていることが示された。

(3) 寺子屋の継続

七戸会場は、平成29年度から30年度と2年に渡り実施してきたので、モデル事業としては終了することとなった。町内にある七戸高校生が中心となり実施していたが、七戸高校・児童館双方の事業に対する評価が高く、継続実施を望む声が上がったため、協議した結果、令和元年度は七戸高校の青少年赤十字部の活動の一環として活動を維持することが決まった。青少年赤十字部を中心に、部員以外の生徒でも参加が可能となり高校全体の取組となった。

実施に当たっては、事業のノウハウを持つ当センターが全面協力し、当センター社会教育主事が参加希望者に対して事業説明やコミュニケーション研修を行った。その後は、高校生が中心となり活動内容などを組み立て、児童館と話し合いながら計画を立てていくことができた。第1回目の寺子屋は18名の高校生が参加し、高校生が全て進行し自分たちで考えたレクリエーションを小学生と楽しみ、これを月1回程度定期的で開催していくこととなった。

これは、当センターのモデル事業が自主的

な事業へと引き継がれたケースとして、今後の可能性を示していると考えられる。

【七戸高校でのコミュニケーション研修と七戸高校主催による第1回寺子屋の様子】
（七戸高校でのコミュニケーション研修）



（児童館での第1回目の寺子屋）



城南児童館 寺子屋 ボランティア参加生徒募集

青少年赤十字部の部員と一緒に、城南児童館の小学生に勉強を教えたり、一緒にレクをするボランティアを募集します。保育士や教員を志望している生徒、その他、人と関わることが好きな生徒を歓迎します！

予定している活動	レク、絵本の読み聞かせ、勉強など 参加生徒にローテーションで企画してもらいます
活動予定日	5月23日(木)、6月13日(木)、7月25日(木)、8月29日(木)、 9月19日(木)、10月31日(木)、11月14日(木)、 12月19日(木)、1月9日(木)、2月13日(木)、3月5日(木) ※月1回 ※参加できる日だけでも可
活動時間	16:00~17:00

昨年度の様子



参加者には、5月21日(火)の放課後に実施するオリエンテーションでコミュニケーション等について学習してもらいます(1時間程度 必須)

申込は、5月16日(木)
2階職員室 五館まで

場所は七高から徒歩3分です

図8 寺子屋参加者募集チラシ

V 青少年を対象とする事業について市町村の動向

平成28年度から演習「寺子屋」を取り入れ、モデルプランとして県内各所で開催してきたなかで、特に児童館、放課後子ども教室で「寺子屋」を実施することが、参加する中学生・高校生にとっても、受け入れる施設にとっても効果があることが分かってきた。また、七戸町で高校が主体となり児童館での「寺子屋」を実施するなかで、高校が参加生徒の募集や運営を行いながら、当センターが事前に実施する研修やレクリエーションのノウハウを提供するという形で実施・運営していくことができるというモデルケースを作ることができた。

そこで、人財育成事業としての「寺子屋」実施のさらなる可能性について、各市町村での既存の青少年対象事業と寺子屋実施のニーズをアンケートで調査の上、考察することとした。

1 市町村対象アンケート

【対象】
各市町村教育委員会（40カ所）
回収 34（回収率85%）

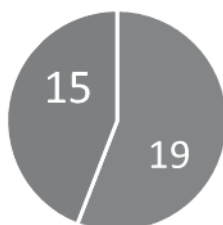
【方法】
質問紙を電子メールで送信

- 【内容】
- ① 青少年が地域活動に参加する事業を実施しているか。
 - ② 事業を実施している場合、どのような内容で実施しているか。
 - ③ 事業を実施している場合、どのような目的で実施しているか。
 - ④ 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等で、青少年がボランティア活動等で活動に参加することはあるか。
 - ⑤ 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に、青少年を派遣する仕組みができた場合活用してみたいか。
 - ⑥ 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に青少年が参加する場合、期待することは何か。
 - ⑦ その他、青少年が参加する事業についての意見。

【結果】

【問 1】 青少年が地域活動に参加する事業を実施していますか？

①実施している	19
②実施していない	15



■ ①実施している ■ ②実施していない

図 9 青少年が参加する地域活動の実施

【問 2】 事業を実施している場合、どのような内容で実施していますか？
(複数あった事業のみ掲載)

実施自治体数	事業内容
9	祭りへの参加
6	地域探求活動
3	ボランティア活動
3	清掃活動への参加
2	地域課題への取組

【問 3】 事業を実施している場合どのような目的で実施していますか？(複数回答可)

①	人材育成	10
②	地域への愛着や誇りの醸成	14
③	社会貢献活動参加促進	9
④	その他(幅広い世代間の交流)	1

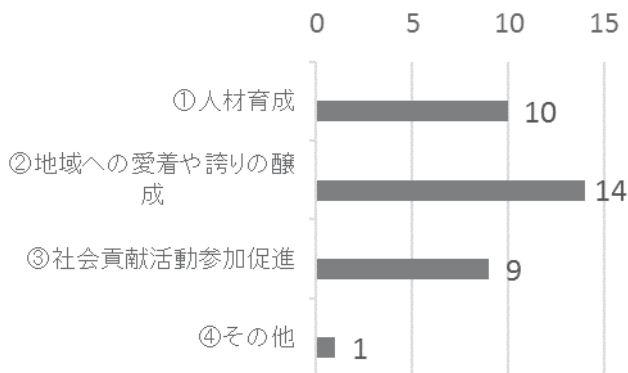
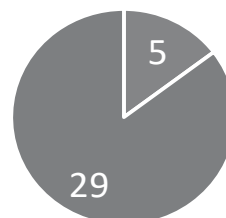


図 10 事業目的

【問 4】 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等で、青少年がボランティア活動等で活動に参加することはありますか？

①ある	5
②ない	29

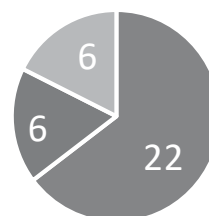


■ ①ある ■ ②ない

図 11 青少年の参加

【問 5】 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に、青少年を派遣する仕組みができた場合活用してみたいですか？

①活用してみたい	22
②活用しない	6
③分からない	6



■ ①活用してみたい ■ ②活用しない ■ ③分からない

図 12 青少年を派遣する仕組みの活用希望

③分からない理由

- ・放課後子ども教室の企画・運営は各コーディネーターの裁量によるとともに、事務局側として派遣に係る旅費、謝金、保険などの対応について検討する必要があるため。
- ・受入れる事業所の都合もあり、派遣業務の内容等の調整が必要なため。
- ・放課後子ども教室を実施していない。また、青少年はスポーツ活動等で多忙となり、時間が取れず、活動に参加できる青少年がいないと思われる。

- ・活動に協力してくれる個人・団体があるか不明なため。
- ・どのような活動にどういった人を派遣してくれるのか分からない。
- ・委託等により実施しており、教室・クラブ担当者と青少年の活用方法等についての協議が必要になるため。

【問6】放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に青少年が参加する場合、期待することは何ですか？（複数回答可）

①	学びの支援	17
②	体験活動の支援	22
③	遊びの支援	17
④	異年齢交流	15
⑤	その他	1

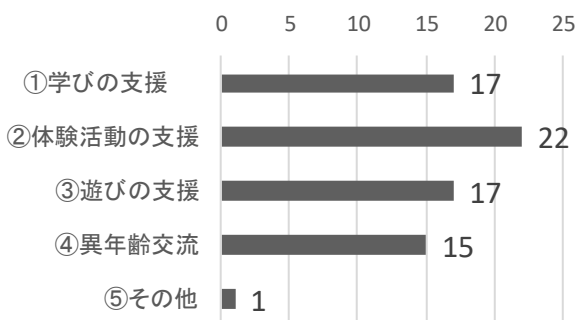


図13 期待すること

【問7】その他、青少年が参加する事業について、御意見や貴市町村としての方向性などありましたら御記入ください

- ・中学生が学校行事で保育園や老人福祉施設での体験活動を行っている。ただ、地域に高校や大学がないためか高校生以上が地域活動へ参加することはほとんどない。今後、少年教育や青年教育の強化が必要と考える。
- ・青少年が参加している事業として、子ども職業体験にボランティアとして中学生に協力いただいている。実際には児童を対象とした事業は多いものの青少年を対象とした事業等は少ないので、人的意見としては中学生の事業など展開していきたい。

- ・放課後児童クラブの活動については、有資格者を放課後児童支援員として市が雇用しているのが現状であるため、ボランティアにどの程度従事してもらうか、また、非有資格者であろうボランティアに放課後児童クラブに従事させることになる、事前に保護者からの理解を得る必要がある。また、保険等の予算措置を含めて検討する必要がある。
- ・地域活動に参加する事業は実施していないが、地域で活躍できる人財育成を目的とした事業を行っている。
- ・活動のイメージができなかったので事例を示していただければ助かります。
- ・高校生を中心に地域を知ることの大切さ、考えることの大切さを学ぶきっかけになったが、成果を継承していくことの難しさが考えられる。（勉強、部活動など多忙な時間の中でできること、得るものは何か）
- ・近年、青森県の社会教育では高校生を対象とした事業を実施しているが、高校がない地域もある。さらに都市部と異なり、交通機関が弱く、ボランティア等の移動手段を確保できない地域もある。事業実施を考えた場合、参加する青少年が主体的に子どもたちへプログラム等を提供してほしい。放課後運営団体が子どもの安全を確保しつつ、青少年も指導するとなると運営側の負担が大きい。また市町村教委が放課後運営団体と青少年団体との連絡調整役になると運営側の負担が大きい。上記のような現状を理解していただき、事業を実施していただければ幸いです。

【クロス集計】

「放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に青少年を派遣する仕組みができた場合の活用希望」には、何が影響があるのかを調べるため、【問1】と【問4】、【問1】と【問5】との関連を調べた。

表11【問1】と【問5】の関連

		1. 青少年が地域活動に参加する事業を実施していますか？		
		している	していない	
5. 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に、青少年を派遣する仕組みができた場合活用してみたいですか？	利用したい	13	9	22
	利用しない	3	3	6
	その他	3	3	6
		19	15	34

表12 【問2】と【問5】の関連

		4. 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等で、青少年がボランティア活動等で活動に参加することはありますか？		
		している	していない	
5. 放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に、青少年を派遣する仕組みができた場合活用してみたいですか？	利用したい	4	18	22
	利用しない	0	6	6
	その他	1	5	6
		5	29	34

2 アンケート結果考察

本アンケートでは、青少年を「中学生・高校生・大学生」と定義し回答して頂いた。また、各市町村教育委員会を通じてアンケートを実施したが、事業が複数部署にまたがる場合などは、教育委員会以外の担当部署にも尋ねて頂いた。本アンケートは各市町村の詳細な情報を集めることを目的とはしておらず、あくまでも現状やニーズを知ることを目的としており、その視点で考察したい。

まずは、回答して頂いた市町村の内半数以上に当たる19自治体で、青少年が参加する事業を実施しているということから、市町村においての青少年対象事業のニーズがあることがうかがえる。既存の事業内容は「祭りへの参加」「生涯学習課主催『地域のお宝』を学び地域活動を担う高校生育成事業」や「ボランティアガイド」などを含んだ地域探求活動など多岐にわたるが、特に高校生を対象とした事業が最多となっている。大人が「祭りの華やかさと参加者の増加をねらっていること」や「地域を学んで地域を好きになって欲しい」と考えているからであり、中・高校生にとってみても具体的で分かりやすく活動に参加しやすいと考えられる。

一方、市町村において、放課後子ども教室や放課後児童クラブ等に青少年が参加することは5自治体と非常に少ないが、仕組みができた際に希望したいという市町村は22と半数以上であることがわかる。クロス集計を見ると、青少年が参加する事業の有無と、放課後子ども教室や放課後児童クラブへの青少年の参加希望は関連が無いが、すでに放課後子ども教室や放課後児童クラブに青少年が参加している全市町村が参加を希望していることから、実施市町村にとってはその効果が理解されていることが考えられる。また、「寺子屋」

の仕組みを活用するかどうか分からないと答えた理由として、業務内容の調整や青少年の確保、保険などがあげられているが、この点はこれまでのモデル事業のノウハウ等を用いて当センターが協力することで解決できると考える。目的としては、アンケート回答で得られた「人財育成」、「地域への愛着や誇りの醸成」、「社会貢献活動参加促進」としては大きな差は無い。青少年の育成事業を考える際には、この3つを盛り込むことで市町村のニーズに近づくことができると考えられる。

以上のことから、児童館や放課後子ども教室で「寺子屋」実施を希望する市町村に中学生・高校生を派遣する事業を検討するに当たり、以下の点を考慮する必要があることがわかった。

- ・事業に対する市町村のニーズはある。
- ・実施に当たっては、参加する中学生・高校生が活動をイメージしやすいことが大事。
- ・中学生、高校生が事業に参加することの効果やメリットを市町村に分かりやすく伝えることが必要である。
- ・青少年の確保や保険などを今年度までのノウハウを生かし当センター主導で行ったり、共同で行ったりすることで伝えることができる。
- ・「人財育成」、「地域への愛着や誇りの醸成」、「社会貢献活動参加促進」といった市町村と目的を共有する。

また、当モデルプランを作成するに当たり先行事例を調べたところ、広島県教育委員会において、大学生を放課後子ども教室に派遣する事業を実施していることがわかった。趣旨は、広島県内で実施している地域学校協働活動推進事業を充実させるため、広島県内の大学生ボランティアチームを「ワクワク学び隊」を派遣するという内容で、平成30年度は約200回の派遣をおこなっているということであった。広島県では大学生ボランティアチームがそれぞれ趣向を凝らし、読み聞かせ、ヒップホップダンス、実験などを行っており、充実した活動内容となっている。

以上の点を基に、一つのモデルプランを作成した。

VI モデルプラン

1 趣旨

県内市町村地域コミュニティの活性化や郷土に対する子どもたちの理解を深めるため、土曜日等（日曜日・祝日・長期休業中を含む）の学習活動に高校生・大学生を派遣し、地域資源を活用した異年齢交流を行う事業である。

2 対象市町村

放課後子ども教室推進事業に取り組み、土曜日等に派遣を希望する市町村

放課後児童クラブ等に取り組み、土曜日等に派遣を希望する市町村

3 内容

学習支援、レクリエーション、体験活動

4 派遣対象

高校生 居住市町村へ派遣する。

大学生 希望により居住市町村以外へ派遣する。

5 派遣実施までの流れ

①高校生・大学生向け

募集，説明の実施
参加希望者の取りまとめ
研修の実施



高校生・大学生ボランティアグループの形成

②市町村向け

募集，説明の実施
派遣希望の取りまとめ



市町村派遣希望一覧の作成

③実際の派遣

市町村派遣希望に合わせて，高校生・大学生ボランティアグループをマッチング打合せは，市町村とボランティアグループが直接行う。（初年度は当センターが主導で行う）

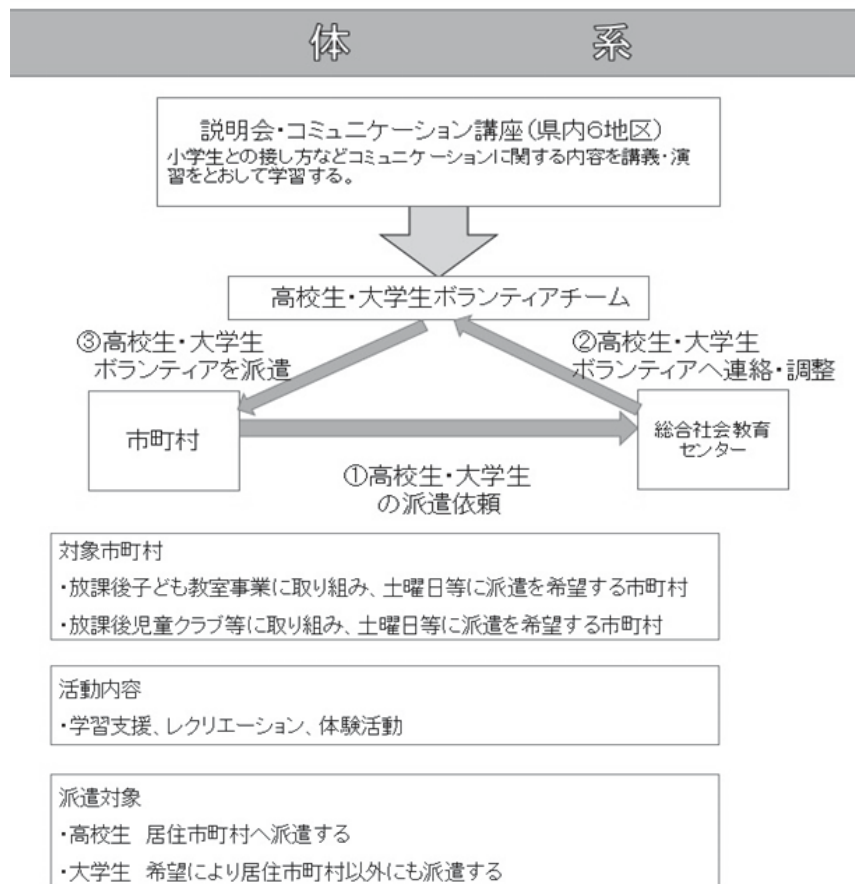


図13 事業体系図

アンケート結果から、盛り込むべき配慮事項として、

- ①参加者に係る保険料負担
- ②当センターによる説明会・参加者取りまとめの実施
- ③当センターによる参加者と市町村との連絡調整

が欠かせない事項となってくる。

当モデルプランは、高校生・大学生の主体性の増進や郷土理解の推進を考えており、特に高校生は居住市町村の活動に参加することを考えている。高校統廃合により居住市町村の高校が無くなり居住地外の高校に通う高校生にとって地元である居住地に目を向けるきっかけとなると共に、市町村にとっても「人財育成」、「地域への愛着や誇りの醸成」、「社会貢献活動参加促進」に繋げることができるのではないかと考えている。その際には、市町村によって抱える課題や事情は異なることから、当モデルプランをベースにしながら、一緒に話し合いながらよりよい形にしていくことが理想である。

VII 仮説の検証

研究仮説（再掲）

各地域の青少年を地域活動に参画させることで、郷土愛が深化し、生きがいややりがいをもつ人が増え、明るい地域づくりに繋がるのではないかと

当事業を通しての、参加生徒・受入れ施設・自治体のニーズをまとめてきた。参加生徒にとって満足度、意識の変容が高く、意図的に機会を作り参加しやすい環境を整えることでニーズがあることがわかった。また、受入れ施設にとってもニーズがあり、自治体にとってもモデルプランを実施することで「人財育成」、「地域への愛着や誇りの醸成」、「社会貢献活動参加促進」に繋げることができることがわかった。

以上のことから、このモデルプランが本事業の仮説である「各地域の青少年を地域活動に参画させることで、郷土愛が深化し、生きがいややりがいをもつ人が増え、明るい地域づくりに繋がるのではないかと」を実証し、「地域を支える人財」、「次代を担う青少年」となり、更に下の世代へと持続できる好循環へと繋げていかなければならない。

VIII 終わりに

今回、参加者からのアンケートに加え、「寺子屋受入れ施設アンケート」、市町村教育委員会を対象とした「青少年対象の事業に関するアンケート」を実施し、受入れ施設や市町村の現状や事業に対する率直な意見を聞くことができたことは、青少年を対象とした人財育成モデルを考える上で大変貴重であった。業務多忙な中、受入れて頂いた施設やアンケートに答えて頂いた方々に感謝申し上げたい。

「まち・ひと・しごと創生青森県長期人口ビジョン」の推計では、2030年度の本県人口は109万9,309人となり、特に生産年齢人口と呼ばれる15歳～64歳は減少し、65歳以上の高齢人口の増加が予想されている。人口減少社会の中で、地域コミュニティの機能低下や経済活動の縮小が懸念される中、地域の課題に立ち向かう青少年の果たす役割はますます重要となることが想像できる。また、青森県基本計画「選ばれる青森」への挑戦では、2030年の目指す姿の一つに「あおもりを愛し、新しい時代を主体的に切り拓く青森県民」を掲げている。

これまでの寺子屋の活動を通じて「こんなはずじゃ無かった」「なんでできなかったのだろう」という悔しさをにじませた高校生が、参加を重ねる毎に工夫を重ね自信を付けていく姿をたくさん見ることができた。今回のモデルプランをきっかけに、青少年が自分の住む地域に関心を持ち、自分が住む地域の人との繋がりの中で、青森で生きる未来人財として活躍してくれることを期待している。更に、関わった中・高校生にあこがれを持った小学生も、将来同様の活動を通じ地域への愛着や誇りが醸成されることで、持続的な地域づくりの一助となることを期待している。

【「『サンタワールド』de 楽しもう」参加中学生・高校生集合写真】



<引用・参考文献>

- ・ 総務省統計局
(<https://www.stat.go.jp/index.html>)
- ・ 青森県企画政策部(2019)
「平成30年青森県の人口」
- ・ 坂本 徹
「アクティブで熱い大学生集団をパートナーに一異年齢交流をベースにした青少年育成事業」日本生涯教育学会年報第37号
- ・ 青森県環境生活部(2018)
「青森県子ども・若者白書」平成29年度版
- ・ 青森県教育長生涯学習課(2019)
「平成31年(2019年)度青森県の社会教育行政」
- ・ 青森県総合社会教育センター(2017)
「研究紀要」
- ・ 青森県企画政策部(2019)
「青森県基本計画『選ばれる青森』への挑戦」
- ・ 広島県立生涯学習センター社会教育主事小早川かおり(2013)
「大学生ボランティアチーム『ワクワク学び隊』派遣の成果と課題～放課後子ども教室の充実・活性化に向けて～」広島県立生涯学習センター平成24年度研究成果報告書
- ・ 広島県立生涯学習センター社会教育主事大下展弘(2014)
「大学生ボランティアチーム『ワクワク学び隊』派遣の充実改善に向けて」広島県立生涯学習センター平成25年度研究成果報告書
- ・ 青森県環境生活部(2019)
青少年の意識に関する調査結果報告書

ISSN(International Standard Serial Number)
とは、膨大な刊行量をもつ逐次刊行物の的確な把握と情報処理、流通の円滑化、利用の促進を図る必要から個々の逐次刊行物に与えられる国際的な識別コード番号のこと。

研 究 紀 要

第 31 号

令和2年3月 発行

編集・発行 青森県総合社会教育センター

〒030-0111 青森市荒川字藤戸 119-7

Tel 017-739-1252 Fax 017-739-1279

<http://www.alis.pref.aomori.lg.jp/>

E-mail : E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp

(印刷 青森コロニー印刷)

この印刷物は 600 部作成し、印刷経費は 1 部当たり 237.6 円です。

